

# 生き方につながる意思決定を学ぶ小学校社会科産業学習の開発

三重大学 大学院 教育学研究科  
教育科学専攻 人文・社会系教育領域

神保 匡邦

提出：2016 年 2 月 15 日

## ○目次

はじめに	1
第1章 生きる力と社会科教育	2
第1節 社会で必要とされる生きる力	2
第2節 生き方につながる社会科教育	3
第2章 生き方につながる社会科教育の内容と方法	5
第1節 生き方につながる産業学習の内容「第5学年社会科における産業学習」	5
第1項 農業単元	5
第2項 工業単元	10
第2節 生き方につながる社会科教育の方法としての意思決定	14
第1項 社会科教育における意思決定	14
第2項 生き方につながる意思決定－「目的合理的」と「価値合理的」－	17
第3章 生き方につながる社会科産業学習の先行実践	21
第1節 「目的合理的」な意思決定を学ぶ実践	21
第1項 農業単元 後藤 浩二「堅実に育てる米づくり－松尾隆さんの選択－」	21
第2項 工業単元 後藤 浩二「支える工場から自立する工場へ－S 精機の挑戦－」	27
第2節 「価値合理的」な意思決定を学ぶ実践	31
第1項 農業単元 橋本 顕彦「時江さんと私達の菊作り」	31
第2項 工業単元 二子石 雅敬「手作業にこだわるシャツ工場の挑戦」	34
第3節 先行実践の分析と課題	37
第4章 生き方につながる意思決定を学ぶ産業学習の開発	40
第1節 大単元「長島の産業」の構成	40
第2節 農業単元「長島のトマトの未来を考えよう」	41
第3節 工業単元「長島の伊藤産業の未来を考えよう」	44
第4節 授業実践の成果と課題	49
おわりに	52
参考文献	53

## はじめに

小学校の教員となり、10年以上が過ぎた。その間、さまざまな子ども達と関わってきた。自分で考える前にすぐに先生や友達に聞いて助けを求める子、先生の指示がないと動けない子、友達とうまく関われない子、自分の思いが出せない子、物事に取り組んでも少し難しいと感じると途中であきらめてしまう子など、さまざまな課題を抱えた子ども達と出会ってきた。子ども達が少しずつでも成長できるよう手助けをしてきたつもりである。学級での話し合い、休み時間や放課後の子ども達との関わり、保護者との連携などを通して、子ども達がそれぞれの課題を克服し、義務教育を終えた後、社会を生きていく上で必要となるいわゆる「生きる力」をつけたいと考え、取り組みを行ってきた。

しかし、授業を振り返ってみると、教科を教える際に、教科のねらいだけを教えればよいと思っていた自分がある。教科のねらいを達成するのは当然として、それを超えて「生きる力」をつける授業ができないのか、そう思ったことがこの研究に取り組もうと思ったきっかけである。教科の中でも社会科は人の生き方から学ぶことができたり、現代社会における社会のしくみについて学んだりする教科であるので、「生きる力」をつけるのにふさわしい教科であると言える。様々な課題を抱える子ども達が、授業を通して、人の生き方、こだわりを持って仕事に取り組む人の姿を学ぶことで、自分の殻を破るきっかけとなってくれば、と考える。

また、大学時代、山根栄次教授のもとで、社会科教育について学んだにも関わらず、社会科における実践をしてきてないこともあり、もう一度社会科教育について学び直し、今後の実践に活かしていきたいと考えたことがこの研究に取り組んだもう一つの理由である。

## 第1章 生きる力と社会科教育

### 第1節 社会で必要とされる「生きる力」

昨今の教育現場では、「生きる力」という言葉が頻繁に使われている。これからの社会において、子ども達に必要とされるものが「生きる力」である。現行の学習指導要領も、「生きる力」を育むという理念のもとに作成されている。では、「生きる力」とはどのようなものなのか。「生きる力」とは、「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など」とされ、「この『生きる力』は、自己の人格を磨き、豊かな人生を送る上でも不可欠である。」とも述べられている<sup>1</sup>。

この「生きる力」を育てる視点として、(1)問題解決能力の重視、(2)心の豊かさの重視、(3)健康と体力づくりの重視の3つが挙げられている。(1)については、「問題の解決にあたっては、自ら問題を発見すること、自分自身の頭で考えること、自分の発想を基にして解決することを大事にしていく。また、自己評価・相互評価をさせて、自分の学習過程を振り返らせ、学び合えるようにもしていく。」<sup>2</sup>とされており、これは、これまで社会科において、大切にされてきた問題解決学習にも通じることが分かる。

さらに、最近、推進されているキャリア教育においても、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力の4つの基礎的・汎用的能力が挙げられている。

国立教育政策研究所が著した『キャリア教育への招待』では、基礎的・汎用的能力をもとに考えられる小学校におけるキャリア教育の目標例として4つ示されている。この例示の1つに、「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成」がある。「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成」について、次のように書かれている<sup>3</sup>。

集団や社会のために働いている人の存在を理解し、感謝の気持ちを高めるとともに、自分の役割について考え、自分の能力を生かして積極的に仕事をする意識や態度を育てることを目標としたい。学年が進むにつれて視野が広がり、行動範囲も広くなることから、接

<sup>1</sup> 文部科学省(2008)『『生きる力』と資質・能力について(平成20年中央教育審議会答申抜粋)』<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm)>、「(参照 2016-1-28)」

<sup>2</sup> 亀井浩明/有園格/佐野金吾(1998)『キーワードで読む教課審答申』ぎょうせい,p.31

<sup>3</sup> 国立教育政策研究所(2007)『キャリア教育への招待』東洋館,p.19

する人も増えることが予想される。情報量も増加し、それらを整理・活用する情報活用能力や、正しく判断する能力や意思決定能力も求められる。

このように、現在の子ども達には、社会の一員としても、一人の人間としても「生きる力」を身につけていくことが求められている。

## 第2節 生き方につながる社会科教育

社会科において、社会科の目標である「公民的資質の基礎を養う」ことについて、『小学校学習指導要領解説 社会編』では、次のように書かれている<sup>4</sup>。

公民的資質は、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。

また、「児童一人一人に公民的資質の基礎を養うためには、社会科の学習指導において、地域社会や我が国の国土、産業、歴史などに対する理解と愛情を育て、社会的な見方や考え方を養うとともに、問題解決的な学習を一層充実させ、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを一層重視することが大切である。」<sup>5</sup>とも書かれており、こうしたことから社会の形成者として、どう生きるか、そのための力をどのようにつけていくとよいのか、ということが問われていることがわかる。

平成10年の教課審答申の中で、これからの社会科に求められる授業像として、次の3つが取り上げられている<sup>6</sup>。

### (1) 学び方や調べ方重視の授業

特に、今回の改善で、例えば、中学年では各学校で地域に密着した学習が一層弾力的に行われることが求められている。これは、子どもが身近な地域を学習のベースとして、地域の諸事情に直接触れたり、人々にインタビューしたりして、地域への理解を深め、興味や関心をもって楽しく学習できるようにすることを意図しているものである。こうした改善の趣旨を生かした授業を展開していくためには、学び方や調べ方を重視した授業に変えていかなければならない。この学び方や調べ方はどのように社会が変わろうとも、子どもにとっては生きて働く学力となるものである。

<sup>4</sup> 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 社会編』,p.14

<sup>5</sup> 同上書,pp.14-15

<sup>6</sup> 前掲 2,p.169

## （２）選択力の育成を図る授業

これからは、ゆとりの中でじっくりと問題解決に取り組むことができる授業へと変えていかなければならない。そのためには、子ども一人ひとりが自分の興味・関心等に応じて学習課題を選び、主体的に取り組むことができる授業への改造が必要となる。今回、提言された高学年での課題選択等の学習の積極的な実践を期待したい。

## （３）問題解決力を高める授業

「生きる力」は、問題解決力であると捉えることができる。社会科こそ、問題解決的な学習を基本として発足した教科である。これからは社会科の原点に立ち戻り、真に子どもの問題解決力を高めていくことができるような授業づくりに努めなければならない。特に、今回は問題解決学習が成立できるように内容の厳選が図られているのである。今、社会科の授業改造が強く問われている時である。そのためにも、これまでの授業観を根本的に改め、新たな視点で授業改造に取り組む教師の意気込みが必要となる。

このことから、「生きる力」の育成を目指した社会科の授業において求められるのは、主体的に興味を持って、取り組むことができる問題解決学習であることがわかる。

社会や歴史は人が作るものであることから、社会科では、社会的な知識や理解、社会的な見方・考え方を身に付けるとともに、暮らしをよりよくしよう、よりよい社会にしようというような様々な願いや思いを持った人々の生き方に触れ、学び、そうした上で自分の考えを持つ、ということが重要であると考えている。そうすることで、子ども達自身が、一人の人間として、社会の一員として、どう生きるか、何ができるか、ということもより深く考えることができると考えており、こうした生き方につながる社会科教育を進めていくことが、子ども達に「生きる力」をつけていくことにつながると考えている。

こうしたことを踏まえて、生き方につながる社会科教育について考えていきたい。社会科という教科である以上、社会的な見方や考え方を身につけるのは、大前提である。それに加えて、学習を通して、自分を見つめ直し、振り返り、これからの自分を考えることのできる社会科教育が生き方につながる社会科教育である。さらに言えば、これからの自分を考えるだけで終わるのではなく、行動につなげていくことが重要であり、日頃の行動が変わって初めて生き方につながる社会科教育と言えると考えている。

ただし、本当の意味で、生き方につながったかどうかは、子ども一人ひとりの言葉や行動が変わったかを見ていかなければならないため、検証には時間がかかることも頭に入れておかなければならない。

## 第2章 生き方につながる社会科教育の内容と方法

### 第1節 生き方につながる産業学習の内容「第5学年社会科における産業学習」

生き方につながる社会科教育の内容としてふさわしいのは、第5学年社会科における産業学習であると考ええる。その最も大きな理由は、「人」から生き方を学ぶことができるからである。まだまだ人と出会うことの少ない子ども達にとって、さまざまな人と出会うことは非常に大切なことである。実際にさまざまな人と出会い、話を聞き、関わることを通して、子ども達の視野が広がり、たくさんのことを学ぶことができる。産業学習では、テレビの中や遠い世界にいる人ではなく、目の前にいる人から学ぶことができる。そこに産業学習の大きな意味があると言える。小学校学習指導要領における産業学習の内容では、「食料生産に従事している人々の工夫や努力」、「工業生産に従事している人々の工夫や努力」について学ぶとされている。工夫や努力をしている姿には、働く人の熱意やこだわり、生き方などが表れてくる。工夫や努力を学ぶことは、子ども達が自らを見つめ直したり、これからの自分について考えたりするきっかけとなると考えるからである。

#### 第1項 農業単元

第5学年の農業単元では、何を学習していけばよいのか。はじめに、小学校学習指導要領から見ていきたい。小学校学習指導要領では、農業単元の学習内容について、次のように書かれている。

- |  |
|--|
| <p>内容（2）我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることを考えるようにする。</p> <p>ア 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること。</p> <p>イ 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など</p> <p>ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き</p> |
|--|

また、内容（2）の取扱いについて、次のように書かれている。

- |   |
|---|
| <p>内容の（2）のウについては、農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を通して調べることとし、稲作のほか、野菜、果物、畜産物、水産物などの生産の中から一つを取り上げるものとする。</p> |
|---|

このことから、第5学年の農業単元では、稲作と野菜、果物、畜産物、水産物のいずれ

かから一つを選択した2つの生産について取り上げ、上に挙げたア～ウの3つの内容について学習していくこととなる。

ア～ウの内容について、『小学校学習指導要領解説 社会編』で詳しく見ていきたい。

「ア 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること」について、次のように書かれている<sup>7</sup>。

「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること」を調べるとは、様々な食料生産と国民の食生活とのかかわりについて取り上げ、国民の食生活が主食である米をはじめ、野菜、果物、畜産物、水産物などの主な食料を生産する農業や水産業などによって支えられていることを具体的に調べることである。

「食料の中には外国から輸入しているものがあること」を調べるとは、主な食料の自給率や主な輸入先などを取り上げ、国民の食生活を支えている主な食料の中には、国内の各地で生産されたものだけでなく、外国からの輸入に依存しているものがあることを具体的に調べることである。(中略) これらの学習を通して、我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを考えることができるようにする。

「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること」については、「国民の食生活が(中略) 農業や水産業などによって支えられていること」と書かれており、私たちの食生活が農業や水産業によって支えられており、私たちの食生活が農業や水産業と深く結びついていることを理解することが必要であるとわかる。また、「食料の中には外国から輸入しているものがあること」については、「食料の中には、国内の各地で生産されたものだけでなく、外国からの輸入に依存しているものがあること」と書かれており、私たちの食生活は、国内で生産されたものだけで維持していくことは難しいため、食料生産についても外国と結びついていることを理解する必要があることがわかる。

第5学年の子どもたちが「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること」を理解するには、子ども達が生活科で実際に栽培したことのある野菜や、スーパーマーケットなどでよく見かける食材など、身近で子ども達もよく目にする農産物や水産物を教材として取り上げることが効果的であると考えられる。

「イ 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」については、次の通りである<sup>8</sup>。

---

<sup>7</sup> 前掲 4,pp.57-58

<sup>8</sup> 前掲 4,pp.58-59



「我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」を調べるとは、我が国における主な農産物や畜産物の生産量や主な産地、土地利用の特色、及び主な水産物の漁獲量や主な漁港、漁場などの分布を取り上げ、我が国の農業や水産業の概要やそこに見られる特色を具体的に調べることである。

実際の指導に当たっては、我が国の農業や水産業の様子を概観し、そこに見られる大まかな特色を調べるために、地図帳や学校図書館の図書、資料などに掲載されている各種の統計資料や分布図などを活用する必要がある。(中略)これらの学習を通して、我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深いかわりをもって営まれていることを考えることができるようにする。

「我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」とは、「我が国の農業や水産業の概要やそこに見られる特色」と書かれており、統計資料や分布図などの資料を活用し、日本全体の農業や水産業の様子や特色を捉えることが重要であるとわかる。農業であれば、それぞれの農産物が気候や地形と関係していること、水産業であれば、漁港の位置や海流が関係していることなど、農業や水産業は自然環境と深く結びついていることを理解することが必要であるとわかる。

一つの農産物や水産物を教材として取り上げ、その土地でなぜ、その生産が行われているのかを考える中で、自然条件とのつながりを見出すことが内容を理解するうえで効果的であると考えられる。

「ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」については、次の通りである<sup>9</sup>。

「食料生産に従事している人々の工夫や努力」を調べるとは、稲作、野菜、果物、畜産物などを生産する農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を取り上げ、農業や水産業の盛んな地域の人々が、消費者の需要にこたえ、新鮮で良質な物を生産し出荷するために様々な工夫や努力をしていることや、地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして生産を高める工夫や努力をしていることを具体的に調べることである。

「生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」を調べるとは、農業や水産業の盛んな地域では、運輸の働きにより鮮度を保ちながら生産物を早く消費地へ届ける努力をしていることや、生産物の輸送手段や経路、出荷先や出荷量などを判断するために情報を収集している

---

<sup>9</sup> 前掲 4,pp.59-60

ことなどを取り上げ、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きや情報の利用の様子を具体的に調べることである。(中略)これらの学習を通して、我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考えることができるようにする。

「食料生産に従事している人々の工夫や努力」とは、「農業や水産業の盛んな地域の人々が、消費者の需要にこたえ、新鮮で良質な物を生産し出荷するために様々な工夫や努力をしていることや、地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして生産を高める工夫や努力をしていること」と書かれており、「生産地と消費地を結ぶ運輸の働きや情報の利用の様子」とは、「生産地と消費地を結ぶ運輸の働きや情報の利用の様子」と書かれている。食料生産に関わる人々の生産の過程、販売、運輸などについての工夫や努力について、学習することとなる。人々の工夫や努力について考えていく上で、食料生産にかかわる人々の生き方、考え、こだわりなどを学ぶことで、より効果的に理解することができると考えられる。

次に、小学校学習指導要領で示された内容について、子ども達が使用する教科書では、どのように取り扱われているのかを見ていきたい。日本文教出版の教科書を例に見てみると、稲作と水産業が主に取り上げられている。稲作では、米の消費量や米で作られた製品の写真が載せられ、自分たちの食生活と米がどのように関係しているのかについて書かれている。次に、生産量や作付面積の地図とグラフが載せられ、具体的な例として、山形県の庄内平野が取り上げられている。庄内平野の土地利用の様子がわかる写真や日照時間、平均気温のグラフなどが載せられている。続いて、米が手間暇かけて作られる一年間の様子や機械化、品種改良、ブランド化、消費者のニーズに合わせた米作り、米作りが抱える問題、これからの米作りについてわかる資料や生産に関わる人の話などが載せられている。このような構成で生産に関わる人々の様々な工夫や努力について学習できるようになっている。

水産業では、年間消費量についての図が載せられ、私達の食生活と水産物についての関わりが紹介されている。続いて、なぜ、日本で水産物が多く食べられるのか、魚がたくさんとれるのかについて、漁港の水揚げ量と海流の様子、漁獲量、漁業生産額のグラフなどが載せられ、日本のまわりの海では、暖流や寒流などの海流が流れ、大陸棚が広がっていて、漁場に恵まれているからであると説明されている。具体的な漁港の様子として、長崎漁港が取り上げられ、漁港の全体や施設の様子、長崎の漁業の具体的な様子、ブランド化、

輸送、水産業の抱える問題、養殖業、栽培漁業などについてわかる写真や資料、漁業に関わる人の話などが載せられている。このような構成で生産に関わる人々の様々な工夫や努力について学習できるようになっている。

このように、教科書では、子ども達が興味を持ちやすいように、実際の米作りの地域や漁港を取り上げ、写真や図を使い、学習できるような工夫がされている。しかし、単元の内容をより深く理解するためには、子ども達にとって身近に感じることでできる地域にある生産の様子を取り上げ、子ども達自身が自分の食生活と食料生産が身近に感じることでできる農産物などを教材として扱い、学習することがより効果的であると考えている。食料生産に関わる人々の工夫や努力について、教科書でも紹介されているため、学習することはできるが、実際に見学しなければ感じることでできないこともたくさんある。その場でしか感じることでできない音、感覚、施設や周囲、働く人の様子、そこで作られる農産物などの様子、扱われ方などを通して、より実感的に理解することができると考えている。

第5学年で地域の教材を扱うにあたっては、地域の生産活動の理解で終わるのではなく、日本全体の食料生産について理解するよう、留意しなければならない。これに関して、『小学校学習指導要領解説 社会編』の内容の取扱いにおいて、次のように書かれている<sup>10</sup>。

第3学年及び第4学年では、地域の生産活動を通して地域社会に対する理解を深めることに、第5学年では我が国の農業や水産業についての理解を深めることに、それぞれのねらいがあることに留意することが大切である。

地域の生産活動について学ぶことについては、第3、4学年の学習と重なるところがあるが、ねらいが異なることに留意する必要がある。仕事の工夫や特色を学ぶという点では重なるものの、生産から出荷までの輸送などの運輸の働き、貿易、輸出入などによる海外との関係などの概念的な理解や日本全体の食料生産の構造が理解できるよう留意する必要がある。地域の農家などを教材として学習を進めていくと、そこで働く人の思いや姿、生き様には迫れるものの、内容のイに示されている「我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」の日本全体の食料生産の構造については、見えないと考えられる。そのため、地域の農家などについて学習した後、教科書や資料、分布図などを用いて、日本全体の農業や水産業の現状や特色について学習する必要がある。そうすることで、地域の農家などが抱える問題や現状などについて深く迫った上で、日本全体の問題や現状について

---

<sup>10</sup> 前掲 4,p.60-61

学習することとなるため、地域の農家と日本全体の農業や水産業などに共通する働き手の減少、働き手の高齢化などについてもより深く理解することができると考えられる。

## 第2項 工業単元

第5学年の工業単元では、どのようなことを学習していけばよいのか。はじめに、小学校学習指導要領から見ていきたい。小学校学習指導要領では、工業単元の学習内容について、次のように書かれている。

内容（3）我が国の工業生産について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民生活を支える重要な役割を果たしていることを考えるようにする。

ア 様々な工業製品が国民生活を支えていること。

イ 我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など

ウ 工業生産に従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸などの働き

このことから、第5学年の工業単元では、上に挙げたア～ウの3つの内容について学習することとなる。

ア～ウの内容について、『小学校学習指導要領解説 社会編』で詳しく見ていきたい。

「ア 様々な工業製品が国民生活を支えていること」について、次のように書かれている<sup>11</sup>。

「様々な工業製品が国民生活を支えていること」を調べるとは、我が国の工業生産と国民生活とのかかわりを取り上げ、様々な工業製品が国民生活を支えていることを具体的に調べることである。（中略）暮らしの中でどのような工業製品が使われているのかを調査する活動やそれらを工業の種類別に分類・整理する活動などを通して我が国の工業生産と国民生活とのかかわりを具体的に調べることや、我が国の農業や水産業、工業などの中で使われている工業製品を取り上げ、それらの工業製品が産業の発展に果たしている役割を具体的に調べることなどが考えられる。これらの学習を通して、我が国の工業生産は国民生活を支える重要な役割を果たしていることを考えることができるようにする。

第5学年の子ども達が、「工業製品が国民生活を支えていること」を理解するには、様々な工業製品がある中で、子ども達自身が使ったり、目にしたりするような子ども達の生活

---

<sup>11</sup> 前掲 4, pp.62-63

に関係する工業製品を取り上げて、教材として学習することが、より効果的であると考えられる。

「イ 我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など」については、次の通りである<sup>12</sup>。

「我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など」を調べるとは、我が国の主な工業生産の種類、工業地帯や主な工業地域の分布などを取り上げ、我が国全体の工業生産の現状や特色を具体的に調べることである。(中略)例えば、我が国の工業の種類別や規模別の生産額、工場数、工業地帯や主な工業地域の分布、立地などを調べ、我が国全体の工業生産の現状や特色を具体的にとらえられるようにすることが考えられる。これらの学習を通して、我が国の工業生産は国民生活を支える重要な役割を果たしていることを考えることができるようにする。

日本全体の工業生産の現状や特色をとらえることが重要であることがわかるが、日本の工業生産の現状や特色とは、原材料を加工し、質の高い工業製品を作り出せることが日本の工業生産の特色であり、現状は、値段の安い海外製品の流入により、厳しい競争にさらされていること、専門的な知識や技能を持った働き手の高齢化、そうした知識や技能を引き継ぐ後継者の確保が難しいこと、少子高齢化による需要、購買客の年齢層の変化などがあると考えている。このような現状を子ども達に理解させることが必要である。

「ウ 工業生産に従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸などの働き」については、次の通りである<sup>13</sup>。

「工業生産に従事している人々の工夫や努力」を調べるとは、工業の盛んな地域の事例を取り上げ、我が国の工業生産に従事している人々が、消費者の多様な需要にこたえ、環境に配慮しながら、優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていることを具体的に調べることである。ここでは、原材料の確保や製造の過程、製品の販売や消費地への輸送、新しい技術の開発、資源の有効な利用と確保、環境保全への取組などに見られる工夫や努力を取り上げることが考えられる。

「工業生産を支える貿易や運輸などの働き」を調べるとは、原材料の確保や製品の販売などに見られる貿易や運輸などの働きを取り上げ、貿易や運輸などが工業生産を支える大切な働きをしていることについて具体的に調べることである。(中略)実際の指導に当たっては、工業の盛んな地域の事例を取り上げ、見学を取り入れたり視聴覚資料を活用したりし

<sup>12</sup> 前掲 4,p.63

<sup>13</sup> 前掲 4,pp.63-64

て具体的に調べられるようにする。その際、原材料の確保や製品の販売と輸送に見られる工夫については貿易や運輸などの働きとの関連を図ること、製造の過程に見られる生産の工夫として製品の研究開発などを取り上げることなどが考えられる。これらの学習を通して、我が国の工業生産は、国民生活を支える重要な役割を果たしていることを考えることができるようにする。

このことから、「優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていること」と「貿易や運輸などが工業生産を支える大切な働きをしていること」を学ぶことが重要であるとわかる。さらに、『解説』に書かれているように、原材料の確保や製品の販売、輸送、製造場面など、様々な場面での工夫が考えられ、価格や品質につながる工夫などが考えられる。こうした工夫や努力を働いている人達の姿や生き方、考え方から見つけ出したり、感じたりすることが大切であると言える。

次に、小学校学習指導要領で示された内容について、子ども達が使用する教科書では、どのように扱われているのかを見ていきたい。日本文教出版の教科書を例に見てみると、大工場として、三重県にある自動車工場が取り上げられ、自動車が現在の生活を支えるものとして扱われ、ライン作業でロボットを活用しながら、生産している様子や生産工程が分かる写真や図が載せられている。そして、そこで働く人達が働きやすくなるように自分たちで工夫を出し合う様子や、改善されたことが載せられている。また、看板方式や関連工場についても紹介されている。

中小工場の例として、スカイツリーなどにも使われているナットを製造している大阪の工場が取り上げられている。このナットは特殊な技術によって、緩まない構造となっていることが紹介されている。日本の中小工場は高い技術を持っているところが多くあり、最近では、中小工場同士で協力し合って、独自の製品を開発していることや、日本の工場は多くが中小工場であり、日本の工業は中小工場によって支えられていることなどが紹介されている。

このように、教科書では、子ども達が興味を持ちやすいように、実際の工場を取り上げ、写真や図を使い、学習できるような工夫がされている。しかし、単元の内容をより深く理解するためには、筆者は子ども達にとって身近に感じることのできる地域にある工場を取り上げ、子ども達自身が工業製品に支えられていると身近に感じることのできる製品を教材として扱い、学習することがより効果的であると考えている。工業に関わる人々の工夫や努力について、教科書でも紹介されているため、学習することはできるが、実際に見学

しなければ感じるもののできないこともたくさんある。その場でしか感じるもののできない音、感覚、施設や周囲の様子、そこで作られる製品などの様子、機械の扱われ方などを見たり聞いたりすることを通して、より実感的に理解することができると考えている。

第5学年で地域の教材を扱うにあたっては、地域の生産活動の理解で終わるのではなく、日本の工業生産について理解するよう、留意しなければならない。これに関して、『小学校学習指導要領解説 社会編』の内容の取扱いにおいて、次のように書かれている<sup>14</sup>。

第3学年及び第4学年では、地域の生産活動を通して地域社会に対する理解を深めることに、第5学年では、我が国の工業生産について理解を深めることに、それぞれのねらいがあることに留意することが大切である。

地域の工場について学ぶことについては、第3、4学年の学習と重なるところがあるが、ねらいが異なることに留意する必要がある。仕事の工夫や特色を学ぶという点では重なるものの、大企業と中小企業の下請けの関係性、貿易、輸出入などによる海外との関係などの概念的な理解や日本全体の産業構造が理解できるよう留意する必要がある。地域の工場を教材として学習を進めていくと、そこで働く人や経営者の思いや姿、生き様には迫れるものの、内容のイに示されている「我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など」の日本全体の産業構造については、学習できないと考えられる。そのため、地域の工場について学習した後、教科書や資料、分布図などを用いて、日本全体の工業の現状や特色について学習する必要がある。そうすることで、地域の工場が抱える問題や現状などについて深く迫った上で日本全体の問題や現状について学習することとなるため、地域の工場と日本全体の工業に共通する働き手の減少、働き手の高齢化、海外製品との価格競争などについてもより深く理解することができると考えられる。

地域の工場を教材として扱う上で、どのような工場がふさわしいのかを述べていく。坂本光司は、工場（会社）で大切なものは何かということについて、「五人に対する使命と責任を果たす」ことが重要としている<sup>15</sup>。その五人とは、第一が社員とその家族、第二が外注先・下請企業の社員、第三が顧客、第四が地域社会、第五が株主、出資者であり、その五人に対する使命と責任と行動を果たすための行動のことを「経営」と定義している。多くの会社でよく言われるのは、「お客様第一」であるが、坂本は社員が第一に大切であると主張する。その理由について、「お客様を感動させるような商品を創ったり、サービスを提

<sup>14</sup> 前掲 4,p.65

<sup>15</sup> 坂本光司(2008)『日本でいちばん大切にしたい会社』あさ出版,p.20

供したりしなければいけない当の社員が、自分の所属する会社に対する不平や不満・不振の気持ちに満ち満ちているようでは、ニコニコ顔でサービスを提供することなどできるわけがない」からだと述べている<sup>16</sup>。

坂本は、外注先・下請先企業の社員が二番目に大切としている。こうした人達は、「自分の会社の仕事をやってくださっている人々」であり<sup>17</sup>、坂本にいわせると「社外社員」<sup>18</sup>であるという考えからである。このように、坂本は働く社員や仲間を大切にすることを特に優先するべきであると考えている。そうすることで、「社員満足度を高め、外注企業の満足度を高めれば、必然的に顧客満足度も高めることができる。」と述べている<sup>19</sup>。これらのことは、社員を大切にすることで、結果として、顧客も大切にすることになるという考えが推察される。

つまり、よい会社というのは、経営者が、社員を第一として、下請や顧客、地域の人々を大切にしてい、社員がいきいきと自分の会社や仕事に誇りを持ち、安心して働くことができる会社ということになる。

地域の会社の中からこうした「大切にしたい会社」の要素を持った会社を見つけ出し、教材として取り上げ、会社の様子、経営者やそこで働く人の姿や思い、考え方から学ぶことで子ども達は、工業生産にかかわる人々の工夫や努力をより深く理解することができると考えられる。

## 第2節 生き方につながる社会科教育の方法としての意思決定

### 第1項 社会科教育における意思決定

筆者は、生き方につながる社会科教育の方法として、社会科教育に意思決定を位置づけることが有効であると考えている。社会科教育における意思決定について、小原友行は、これからの時代に求められる公民的資質として、意思決定力が必要であると述べ、これからの時代における公民的資質と公民的資質としての意思決定力について、それぞれ次のように述べている。公民的資質については、

「これからの時代に求められる公民的資質は民主的社会の主権者として、今後ますます加速化し深刻していくことが予想される社会の変化や課題に対して、合理的な判断を行

---

<sup>16</sup> 前掲 15,p.21

<sup>17</sup> 前掲 15,p.22

<sup>18</sup> 前掲 15,p.22

<sup>19</sup> 前掲 15,p.26



い、適切な社会的行為を選択していくことができる能力である。自己の社会的行為を合理的に選択し決定する力は、これからの時代を生きる人間にとって、特に求められる能力である。」としている<sup>20</sup>。

そして、公民的資質としての意思決定力について、以下のように書いている<sup>21</sup>。

意思決定力とは、問題場面での自己の行為を科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて選択・決定するために必要な能力であり、目的・目標を達成するために考えられる実行可能なすべての行動案（手段・方法）、あるいは問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から、より望ましいと判断できるものを選択・決定することのできる能力である。具体的には「何をなすべきか」「何がなされねばならないか」「どの解決策がより望ましいのか」という問いに対する実践的判断を行う能力である。したがって、このような意思決定力が、自己の未来の生き方を追求していく能力の中身と考えることもできる。

小原は、意思決定を行う社会的行為をマックス・ウェーバーのいう「目的合理的行為」であり、ジョン・デューイの「知性」に基づく行為であり、見田宗介の「選択的行為」であると定義し、「これからの時代の公民的資質の中核をなすものは、合理的な意思決定に基づいて主体的な社会的行為を行うことのできる意思決定力であると考えることができる。」としている<sup>22</sup>。

さらに、社会科教育における意思決定において、意思決定の力を育成するためには、児童・生徒が「意思決定」の活動を行う必要があり、次の囲みのような過程を踏まえる必要があるとしている。

ア 問題把握…「どのような問題か、人間生活にどのような影響があるのか」「何をなすべきか、何がなされねばならないか、どの解決策がより望ましいのか」  
イ 問題分析（原因究明）…「なぜそのような問題が生じるのか」  
ウ 達成すべき目的・目標の明確化  
…「問題解決によって何を実現するのか、達成すべき目的・目標は何か」  
エ すべての実行可能な行動案（解決策）の提出

<sup>20</sup> 小原友行(1994)「社会科における意思決定」,社会科認識教育学会編『社会科教育学ハンドブックー新しい視座への基礎知識ー』明治図書,pp.168-169

<sup>21</sup> 同上書,p.170

<sup>22</sup> 前掲 20,p.169

…「行動案（解決策）としてどのようなものが考えられるか」

オ 行動案（解決策）の論理的結果の予測と評価

…「もしそのような行動案（解決策）を実行したとしたら、どのような結果が生じるか」

カ 行動案（解決策）の選択と根拠づけ

…「達成すべき目的・目標と行動案の論理的結果から考えて、どの行動案（解決策）がより望ましいのか」「なぜそのように判断したのか」

キ 決定に基づく行動…「やってみよう」

以上の過程を踏まえることで、ア、イの活動の過程で、「問題についての事実認識が形成され」<sup>23</sup>、ウの活動の過程で、「問題に対する価値判断が必要となり、価値認識が形成される。」<sup>24</sup>そして、その後のエからキの過程で「事実認識と価値判断に基づいて実践的な判断が行われる」<sup>25</sup>ことになり、社会認識と意思決定の力を育成することができると述べている。

小原が考える子どもたちに意思決定の力を育成するための過程が明らかになったが、子ども達に意思決定の力を育成するには、小原が述べる過程を踏まえた授業を構成することが必要であり、どのような教材を扱うのがよいか考える必要がある。小原は、授業構成と教材について、「児童・生徒が『意思決定』の活動を行うためには、児童・生徒に『意思決定』を迫るような問題場面に直面させることが必要であり、そのような問題場面を用意するものが、社会的論争問題である。」と述べている<sup>26</sup>。社会的論争問題とは、「個人・集団・組織体が直面している判断の分かれるような問題であり、価値観の違いによって解決策が分かれるような、それゆえ合理的な解決が困難な論争的な問題である。」と定義している<sup>27</sup>。

小原は、教材の例として、「環境問題」の一つである森林問題や「開国か攘夷か」のような歴史的論争問題を挙げているが、その他に模擬選挙などにおいて誰に投票するかというような政治的な意思決定の問題や、生産者がより利益を上げるために、どのような意思決定がふさわしいのかというような経済的な意思決定の問題などが考えられる。

このように、社会科の授業において意思決定を学ぶことで、子ども達は学習を通して得られた事実から、社会背景や社会の状況を踏まえた上で価値判断を行い、よりよい手段や

<sup>23</sup> 前掲 20,p.171

<sup>24</sup> 前掲 20,p.171

<sup>25</sup> 前掲 20,p.171

<sup>26</sup> 前掲 20,p.172

<sup>27</sup> 前掲 20,p.172

方法などについて、一人ひとりが選択・決定していく能力を身に付けることができる。こうしたことから、生き方につながる社会科教育の方法として、意思決定を位置づけることは有効であると言える。

## 第2項 生き方につながる意思決定―「目的合理的」と「価値合理的」―

第1項において、小原の考える社会科教育における意思決定について述べたが、筆者は、その中でも生き方につながる意思決定を社会科教育において学ぶことがより望ましいと考えている。そこで、生き方につながる意思決定とは、どのようなものであるのかについて考えてみたい。

1章で述べたように、生き方につながるとは、学習を通して、自分を見つめ直し、振り返り、これからの自分を考えることができること、さらに行動につなげることである。しかし、生き方につながったかどうかについては、検証に時間がかかるため、すぐには判断できない。そこで、生き方につながる意思決定とは、生き方につながるきっかけとなる意思決定とする。すなわち、学習を通して、自分を見つめ直し、振り返り、これからの自分を考えることのできる意思決定である。

小原は、意思決定を行う社会的行為をマックス・ウェーバーのいう「目的合理的行為」としている。ウェーバーは、目的合理的に行為することとは、「目的、手段、附随の結果に従って自分の行為の方向を定め、目的と手段、附随の結果と目的、更に諸目的相互まで合理的に比較秤量し、どんな場合にも、感情的或いは伝統的に行為することのないこと」としている<sup>28</sup>。

これを産業学習における経済的な意思決定を例に考えてみると、ウェーバーは、経済的行為について、経済的利益を目的とし、純粹目的合理的に行動するとしており、生産者が、効率的に利益を追求するためにはどのような意思決定を行うことがふさわしいのかを考えるということになる。このように、社会科教育における意思決定は、経済的意思決定問題以外にも、先に挙げた社会的論争問題や歴史的論争問題、政治的意思決定問題などは、いずれも「目的合理的行為」としてより望ましいと考えられる案を選択・決定するものであると言える。

ここで、ウェーバーが述べた社会的行為について、もう一度考えてみると、ウェーバーは、小原が述べた「目的合理的行為」以外に、「価値合理的行為」「感情的行為」「伝統的

---

<sup>28</sup> マックス・ウェーバー、清水幾太郎訳(1972)『社会学の根本概念』岩波文庫,p.41

為」の3種類を合わせた4つの種類に人間の社会的行為を分類している。それぞれを見ていくと、「目的合理的行為」とは、「外界の事物の行動および他の人間の行動について或る予想を持ち、この予想を、結果として合理的に追求され考慮される自分の目的のために条件や手段として利用するような行為」<sup>29</sup>であり、「価値合理的行為」は、「或る行動の独自の絶対的価値—倫理的、美的、宗教的、その他の—そのものへの、結果を度外視した、意識的な信仰による行為」<sup>30</sup>であり、「感情的行為」は、「直接の感情や気分による行為」<sup>31</sup>であり、「伝統的行為」は、「身に着いた習慣による行為」<sup>32</sup>であるとしている。

また、ウェーバーは、「目的合理的行為」において、「競合し衝突する目的や結果に決定を下す場合になると、価値合理的な方向を取ることもある」<sup>33</sup>とも述べており、さまざまな社会事象においてなされている意思決定は、「目的合理的行為」にのみ基づいて行われているわけではない。

実際の社会の生産状況を考えた時、すべての生産者が常に最大限の利益を追求しているかということ、必ずしもそうではない。利益を追求する上でも、リスクを承知で最大限の利益を追求するのか、リスクを抑えて安定した利益を追求するのか、というように利益の追求の仕方は、生産者の判断によって異なる。また、利益を追求するものの、重視する点が利益（目的）であるのか、生産者のこだわりや企業の理念などによる利益以外のもの（価値）であるのか、などさまざまな考え方や生き方がある。さらに、「価値」を追求する場合であっても、生産過程に関わる人数によって、追求の程度が変わってくると考えられる。生産者は、商品を生産し、販売することで利益を得る。そのため、生産状況は生活に関わってくる。生活に関わってくる以上、利益を上げていくことは大前提となる。生産に関わる人数が少なければ、生活に影響する人数も少ないため、利益を優先せず、こだわりなどの「価値」を重視し、追求することも可能であると考えられる。人に視点が当たりやすくなるため、子どもたちも生産者の熱意や思いに迫りやすく、学習に深く入り込みやすい。しかし、生産に関わる人数が増えると、それだけ生活に影響する人数も増えることになるため、より利益を重視しなければならない傾向にあると考えられる。そのため、こだわりを持って生産を行いたいと考えてもまずは利益を優先せざるを得ない場合や、現段階で利

---

<sup>29</sup> 前掲 28,p.39

<sup>30</sup> 前掲 28,p.39

<sup>31</sup> 前掲 28,p.39

<sup>32</sup> 前掲 28,p.39

<sup>33</sup> 前掲 28,p.41

益は得られているものの、その利益が減る可能性があっても「価値」を重視する比率を増やしている場合など、生産者、あるいは経営者は、日々葛藤しながら意思決定を行っていると考えられる。そうした中で、先に述べた坂本のいう「日本でいちばん大切にしたい会社」などにおいては、「価値」を重視した経営を実践している会社であると考えられる。生産者が多く関わる場合の意思決定を学ぶことで、実際の社会において、様々な葛藤を持ちながら願いを実現しようと生きている人の姿を学ぶことができると考える。

第5学年で学習する産業学習において、産業の様子や生産にかかわる人々の工夫や努力を学ぶ際には、経済的な要素や社会的な要素から判断する「目的合理的」な視点だけでなく、それだけでは決められない製品や生産、仕事へのこだわりなど、「価値合理的」な視点を含むさまざまな観点から学ぶこととなる。

このような点から、産業学習を生き方につなげていくためには、実際の生産者の意思決定について学ぶことが有効であると考ええる。そこに、「目的合理的行為」を重視している人、「価値合理的行為」を重視している人など、社会を生きているさまざまな人の生き方があらわれる。そうした人や企業などから意思決定を学ぶことが、子ども達のこれからの生き方につながることであり、一つのことに情熱を持って追求したり、こだわりを持って仕事に取り組んだりする姿から子ども達が学ぶことは大きいはずである。しかし、子ども達が実際の社会を生きていく上で、自分のこだわりや思いを常に優先していくことは難しい。こだわりや思いを優先したくてもなかなか思うようにいかないこともある。そのような中で、周囲やその時に置かれた自分の状況を加味しながら、粘り強くあきらめずにどう理想を追い求め、生きていくか、実際に、社会に生きる人の姿からそういったところも学んで欲しい。そのような生産者の実際の意思決定について学んだ上で、生産者の置かれた状況に基づいて児童が意思決定を行い、それについて検討し、最終的に、同じ状況に置かれた場合に、自分なら何を重視して意思決定を行っていくかを、自分の立場から考えて意思決定を行う。このような過程を踏まえることで、子ども達は、「目的合理的」な視点も含みながら、「価値合理的」な視点を取り入れた意思決定を行うことができ、生き方につながる意思決定を学ぶことができると言える。

意思決定を取り扱うにあたっては、こうした理由から、利益を効率的に追求するための工夫や努力を行う「目的合理的」な意思決定だけを学ぶことでも生き方を学ぶことは可能であるが、さらに、利益以外の要素にこだわる「価値合理的」な意思決定を学び、自分や他の人が何を重視して意思決定を行うのかを考えていくことが、より豊かな生き方につな

がと考えるため、「目的合理的」な意思決定と「価値合理的」な意思決定の2種類を取り扱い、生産に関わる人数が少ない場合と多い場合の2通りの意思決定を学ぶことが望ましいと考える。

### 第3章 生き方につながる社会科産業学習の先行実践

この章では、社会科産業学習が生き方につながっているかについて、4つの先行実践を見ていく。第1節で取り上げる後藤浩二の農業、工業単元は、ともに子どもに意思決定を学ばせることを意図して実践を構成しており、第2節で取り上げる橋本顕彦、二子石雅敬の実践は意思決定を学ばせる意図はなく、生産者の生き方を学ばせることを意図して実践を構成している。また、後藤、二子石の実践は社会科における実践であり、橋本は社会科と総合的な学習の時間の複合単元での実践であり、どちらかと言えば、総合的な学習の時間の要素が強い。このような相違点があることを踏まえて実践を分析し、課題について述べていく。

#### 第1節 「目的合理的」な意思決定を学ぶ実践

##### 第1項 農業単元 後藤 浩二「堅実に育てる米づくりー松尾隆さんの選択ー」

この実践は、後藤が「子どもの経済的意思決定を活かす産業学習」の研究において、勤務校である桑名市立桑部小学校第5学年にて、2005年に行った実践の一つである<sup>34</sup>。以下に概要を示す。

校区に在住する62歳（当時）の松尾隆さんの米づくりを教材として行われた。松尾さんは、企業に勤めながら農業を営む兼業農家である。これまでは、本業の企業での仕事に影響がないように、買い取り価格の高い「コシヒカリ」よりも育てやすい「キヌヒカリ」という品種を選択し、栽培してきた。育苗からJAに出荷するまでの作業も、かつては、全て自分の手で行っていたが、体力、機械、時間などの関係により、JAから苗を購入し、乾燥からもみすりまではカントリーエレベーターに委託するようになった。栽培方法についても、負担の多い減農薬・有機肥料よりも負担の少ない農薬・化学肥料を使用して栽培を行ってきた。このように、松尾さんは、これまではもうけは多くないが、着実に利益が得られる、後藤の言う「ローリスク・ローリターン」を選択してきた。

しかし、この度、松尾さんは企業を退職することとなり、専業農家となる。そこで、負担や手間が増えるが、高い収入が得られる「ハイリスク・ハイリターン」を選択する方がよいのか、これまで通りの「ローリスク・ローリターン」を選択する方がよいのか、について考えた。

<sup>34</sup> 後藤浩二(2005)「子どもの経済的意思決定を活かす産業学習」三重大学教育学研究科修士論文,pp.17-28

後藤が「隆さんの生活環境を踏まえ、子どもたちが隆さんの気持ちに共感または葛藤をしながら、自分達の考えを深めていき、経済的意思決定を通して隆さんの米づくりに対する思いに迫っていったほしい」ということを願い<sup>35</sup>、行われた。図1に、学習の流れの概略を示した。

単元の中で「松尾隆さんは、コシヒカリを作るべきか」、「松尾隆さんは、以前のように稲刈り後も自分の家でするべきか」、「隆さんは、減農薬・有機肥料にするべきか」、「これから隆さんはどのような農法をしたらよいか」の4つの主発問を設け、子ども達に経済的意思決定を学ばせている。それぞれの授業について見ていく。

「松尾隆さんは、コシヒカリを作るべきか」についての授業は、なぜ松尾さんは「コシヒカリ」の方が「キヌヒカリ」よりも高く買い取ってもらえるのに、「キヌヒカリ」を作っているのか、という子どもから出された前時の意見を受けて、「松尾隆さんは、コシヒカリを作るべきか」について話し合う、という流れで進められた。田植えの様子を見学し、見学した田んぼでは、「コシヒカリ」と「キヌヒカリ」の2種類が作られており、それぞれの買い取り価格と特徴を掴んだ上で、どちらを作るほうが良いのか、について話し合われた。買い取り価格は3等級に分かれており、30kgあたりの買い取り価格は、次の通りである。

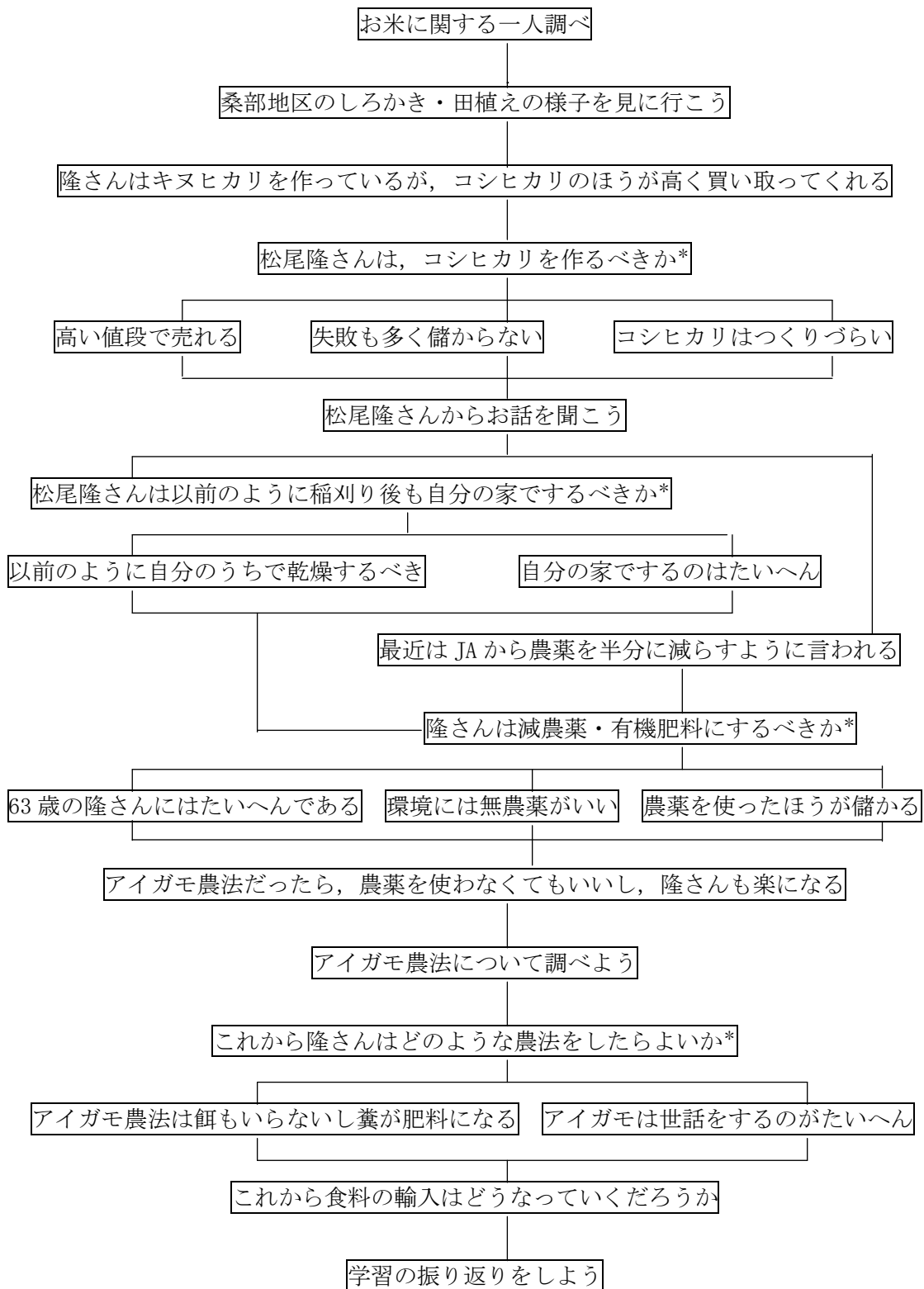
品種	1等	2等	3等
コシヒカリ	6 4 0 0円	6 0 0 0円	4 2 5 0円
キヌヒカリ	5 4 0 0円	5 0 0 0円	4 2 5 0円

同じ1, 2等であれば、「コシヒカリ」の方が高いが、「コシヒカリ」の3等と「キヌヒカリ」の2等であれば、キヌヒカリの方が高くなる。授業の前半では、丈夫で作りやすい「キヌヒカリ」の方が良い、「コシヒカリ」は作るのが難しく、うまく作れない可能性がある、という意見が多数を占める。その後、後藤が「キヌヒカリ」は穂発芽が起こりやすいというデメリットを伝え、少数であるが「コシヒカリ」の方が良いという子どもに意見を求める。「コシヒカリ」を選んだ子どもの理由は、高く買い取ってもらえるからという理由であった。次の展開では、現時点で松尾さんは「キヌヒカリ」を作っていて、「キヌヒカリ」の方が慣れている、という意見が多数を占め、最終的にも「キヌヒカリ」の方が良いと考

<sup>35</sup> 前掲 34,p.18



単元構成 (34 時間)



\* 経済的意思決定場面における主発問

図 1 学習の流れの概略（後藤,2005,p.19 より転載）

えた子どもが多かった。

この授業は、松尾さんに実際に話を聞く前の段階ということもあり、育てやすさを重視して考えている子どもが多く、松尾さんの米づくりに対する思いや考え、松尾さんが作った米を食べる立場である消費者の立場に立って、発言した子どもはほとんど見られなかった。この授業においては、子ども達は、松尾さんの米づくりにかかる時間や手間を考えた上で、どちらの品種を作る方が結果的に利益を出せるか、という「目的合理的」な意思決定について考えていることがわかる。

「松尾隆さんは、以前のように稲刈り後も自分の家でするべきか」についての授業は、「松尾隆さんは、コシヒカリを作るべきか」についての授業後、松尾さんに実際に話を聞き、子ども達の中から出された「以前は、松尾さんは自分の家で全部していたのに、どうして今はカントリーエレベーターに出すのか」という疑問を受けて、「松尾隆さんは、以前のように稲刈り後も自分の家でするべきか」について話し合う、という流れで進められた。松尾さんは、育苗からJAに出荷するまでの作業も、かつては、全て自分の手で行っていたが、体力、機械、時間などの関係により、JAから苗を購入し、乾燥からもみすりまではカントリーエレベーターに委託するようになった。乾燥からもみすりまでの費用は100kgあたり約1,600円かかり、松尾さんは年間約24,000kg生産することができるため、実際に乾燥からもみすりまでにかかる費用は384,000円ということになる。この話し合いは2回行われた。1回目はこの費用について子ども達がわからないまま、話し合いが進められた。このため、松尾さんが自分で作った米を食べたいか、カントリーエレベーターに出した方が楽かの意見を中心に話し合われたが、カントリーエレベーターに出すといくらかかるのかがはっきりせず、話が進まず終わってしまった。2回目では、カントリーエレベーターに出した時の費用がわかった上で、話し合いが行われた。1回目の話し合いでわからなかったカントリーエレベーターに支払う費用がはっきりしたため、その費用である38万円か自分の家でやるために購入した機械の257万円のどちらを高いと考えるか、に意見が分かれ、話し合いが進められた。話し合いが進む中で、「機械が壊れたら」、「機械はいつ壊れるかわからない」などの意見も出され、さらに、「カントリーエレベーターだと7、8年で257万円になる」というように、金額の比較のみに終わるのではなく、減価償却費などに注目している子どももいることがわかる。その後、松尾さんは2人暮らしのため、自分の家で作業をするには、負担が大きいという意見も多く出された。授業記録を見ていくと、「松尾隆さんは、以前のように稲刈り後も自分の家でするべきか」について話し合う中で、「せつ

かく、自分で作った米なのに」、「苦労して作ってきたお米なのに」などといった子ども達の発言が見られる。松尾さんが、比較的育てやすい「キヌヒカリ」の方を選び、作っているとはいえ、事前の話の中で、米づくりの大変さなどについて話し、子ども達もそのことを感じ取ったのではないかと推察できる。2回の話し合いを通して、生産者の思いに迫りつつ、金銭的な負担か肉体的な負担のどちらを選択するのか、ということについて具体的な数字をもとに話し合う子どもが増えてきたことがわかる。

この授業においては、子ども達は、松尾さんの立場から、毎年 38 万円を負担するのがよいか、手間や時間をかけながら 257 万円で購入した機械を使用するのがよいか、どちらを選択するのがよいか、という「目的合理的」な意思決定について考えていることがわかる。

「隆さんは、減農薬・有機肥料にするべきか」についての授業は、「松尾隆さんは、以前のように稲刈り後も自分の家でするべきか」について話し合った授業後、隆さんからの手紙の「JA からは、減農薬・有機肥料の米作りを勧められる」という文に子ども達が関心を持ったことから「環境にやさしい減農薬・有機肥料」か「比較的育てやすい農薬・化学肥料」にするのかについて話し合う、という流れで進められた。「農薬・化学肥料」と「減農薬・有機肥料」を比較すると、作るコストは「減農薬・有機肥料」の方が多くかかり、収入としては減ってしまう。作るコストと収入金額の違いについて理解した上で、話し合いが進められた。「減農薬・有機肥料」が良いと主張する子どもは、収入や育てやすさよりも環境を重視して発言していた。また、今まで話し合ってきたテーマの関係もあると思うが、食べる人達の安全性について考えて発言している子どもが見られるようになってきた。「農薬・化学肥料」が良いと主張する子どもは、松尾さんの育てやすさと収入を重視して発言していた。利益、環境、育てやすさ、消費者の安全性などの視点から、子ども達が自分の考えを持ち、話し合っていることがわかる。

この授業において、子ども達は、コストや収入、育てやすさを重視した「目的合理的」な意思決定や費用はかかるため、利益は少なくなるものの、環境や安全性に配慮した「目的合理的」な意思決定など、いろいろな「目的合理的」な意思決定について、学んでいることがわかる。

「これから隆さんはどのような農法をしたらよいか」についての授業は、「隆さんは、減農薬・有機肥料にするべきか」について話し合う中で出された「アイガモ農法」について調べた後、「農薬・化学肥料」と「減農薬・有機肥料」に加えて「アイガモ農法」を含めて、「これから隆さんはどのような農法をしたらよいか」について話し合う、という流れで進

められた。前回の授業では、「アイガモ農法」は良い所ばかりだと興味を持った子ども達だが、調べてみると、かなり手間もかかり、コストもかかるということを理解した上で話し合いが進められた。「農薬・化学肥料」がよいと主張する子ども達は、松尾さんの負担を考えた上での選択であることが発言から読み取れる。「減農薬・有機肥料」が良いと主張する子ども達は、環境や安全性などを重視し、「減農薬・有機肥料」と「アイガモ農法」とどちらが良いかを考え、「アイガモ農法」に比べてコストが少ない「減農薬・有機肥料」を選択していることが発言から読み取れる。「アイガモ農法」が良いと主張する子ども達は、コストや手間よりも環境や安全性を重視し、選択していることが発言から読み取れる。松尾さんの負担、環境、安全性、コスト、作りやすさなどについて、子ども達それぞれが重視する視点によって、農法を選択し、話し合っていることがわかる。

この授業において、前時同様、効率よく生産し、利益を追求する「目的合理的」な意思決定や利益は少なくなるものの、環境や安全性に配慮した「目的合理的」な意思決定について考え、それぞれの視点から意思決定を行っていることがわかる。

後藤は、何度も意思決定を子どもにさせながら実践を行った。繰り返し、意思決定を行い、その選択について話し合わせることで、子ども達に社会的な見方や考え方が身についてきたことがわかる。「隆さんの生活環境を踏まえ、子どもたちが隆さんの気持ちに共感または葛藤をしながら、自分達の考えを深めていき、経済的意思決定を通して隆さんの米づくりに対する思いに迫って行ってほしい」という願いを持って実践を行った

<sup>36</sup>。松尾さんは、年齢、仕事、家族構成などを考慮し、最大限の利益を追求するのではなく、着実に利益の得られる「ローリスク・ローリターン」を選択し、米づくりを行ってきた。子ども達は、この実践において、生産者の意思決定について考えることを通して、松尾さんのような「ローリスク・ローリターン」の生き方を知ることができた。しかし、生き方を知ることではできたが、松尾さんの生き方について、考察まではしていない。産業学習において、生産者の工夫や努力について学ぶ上で、生産者の思いやこだわりを知ることが重要である。生産者の思いやこだわりについて追究することが、生き方につながると考えられる。この授業記録には、「隆さんの気持ち」や「米づくりに対する思い」についての記述がないため、どのような気持ちで米づくりをしているのか、現在やこれからの生活や米づくりについて、どのように考えているのか、子ども達がどこまで迫れたのかについては、資料がないため、不明である。

---

<sup>36</sup> 前掲 34,p.18

## 第2項 工業単元 後藤 浩二「支える工場から自立する工場へーS精機の挑戦ー」

この実践は、後藤浩二が「子どもの経済的意思決定を活かす産業学習」の研究において、勤務校である桑名市立桑部小学校第5学年にて、2005年に行った実践の一つである<sup>37</sup>。後藤は、経済的意思決定を学ぶ上で、生産者における「ローリスク・ローリターン」と「ハイリスク・ハイリターン」の双方を教材として学ばせることが望ましいと考え、前項で取り上げた「ローリスク・ローリターン」の「堅実に育てる米づくりー松尾隆さんの選択ー」に対して行われた「ハイリスク・ハイリターン」の実践である。図2に、学習の流れの概略を示した。

この実践は、校区にある自動車の部品を作る機械の部品を製造していたS精機を教材として行われた。S精機は昭和36年の創業の会社である。1991年にFCT（油圧）というバリ取り機を開発して、製造方針が大きく変更されてきた。特許を取得し、徐々に自社製品の売上の割合を増やし、2005年時点で約50%を占めている。

自社製品の納入先は、次の通りである<sup>38</sup>。

FCTを搭載した自社製品の納入先として、トヨタ自動車をはじめ、住友金属、パロマ工業など、126社にも渡る。(1997年3月1日現在)

自社製品の値段の内訳は、次の通りである<sup>39</sup>。

社外から購入してくる材料費が約44%、FCT本体や従業員の労働費を含む社内での製造費は約16%、純利益が約40%となる。もちろん、この40%の中には、技術革新（イノベーション）のための開発費が含まれている。

また、会社設立当初から製造している機械の部品の値段の内訳は、次の通りである<sup>40</sup>。

材料費が約15%、製造費が約80%、純利益が5%である。

今後、自社製品の需要層は広がってくると考えられるが、自社製品の売上台数は月平均6台くらいだが、0～10台まで、売上の変動が大きい。このような状況下で、S精機は、将来的には自社製品にて会社を経営していく意向である。「大きな危険を伴いながら、多く

---

<sup>37</sup> 前掲 34, pp.29-38

<sup>38</sup> 前掲 34, p.29

<sup>39</sup> 前掲 34, pp.29-30

<sup>40</sup> 前掲 34, p.30

の利益を上げる方法である<sup>41)</sup>、後藤の言う、「ハイリスク・ハイリターン」の選択をしていくこととなる。こうしたことを踏まえ、後藤が、「グローバル社会が進む中で自社製品を開発し、外国製品にも競争で負けない独自製品を製造している工場を取り挙げることにより、これからの中小工場の経済的意思決定を子どもたちに考えさせることができる」と考え<sup>42)</sup>、行った実践である。図2に学習の流れの概略を示した。

単元の中で「自社製品の700万円は高いか」「S精機は、近い将来自社製品だけをつくる会社にしてはどうか」の2つの主発問を設け、子ども達に経済的意思決定を学ばせている。それぞれについて見ていく。

トヨタ工場に見学に行き、大工場について学習した後、「桑部地区にある自動車の関連工場を学習してみよう」として、S精機の学習に入った。「自社製品の700万円は高いか」についての授業は、S精機を見学した後、トヨタ工場とS精機の比較をする中で、見学させてもらった自社製品が700万円するのは、どう思うか聞いたところ、「高い」と発言した一部の子ども達の声を受けて、「自社製品の700万円は高いか」について2回にわたって話し合う、という流れで進められた。1回目の授業前半では、700万円は安いという意見が多く出された。子ども達にとって、世界で一つしかない、というのが大きな理由となっている。次に、ちょうどいい、と考える子どもの発言が増える。かなり大きな機械であることから、700万円の値段は妥当だという考えである。後半では、もう少し、値段を下げるべきだと考える子どもの発言が増える。それを受けて、安すぎると逆に信用してもらえない、との意見が出され、ちょうどいい、という考えに変わる子が増えて授業は終わる。この授業では、特許の価値をどこまで子ども達が理解しているかは読み取れないが、世界に一つしかないことに、価値を見出している子どもが多い。また、減価償却費や需要と供給のバランス、価格の仕組みからなどについての視点から考えて発言している子もいて、経済的思考が身についてきた子もいることがわかる。2回目の授業では、1回目について、世界に一つしかないものであるから、700万円は安いと考えるグループと現段階で700万円で売れているのだから、ちょうどよいと考えるグループに分かれた。授業記録を見ていくと、この授業では、自社の機械の値段が700万円というのは適切かどうか、いくらに設定すれば、より買ってもらいやすくなり、利益を上げることができるか、について話し合われている。子ども達は、自社の機械の値段を700万円としたS精機の「目的合理的」な意思決定について考えているこ

---

<sup>41)</sup> 前掲 34,p.8

<sup>42)</sup> 前掲 34,p.30

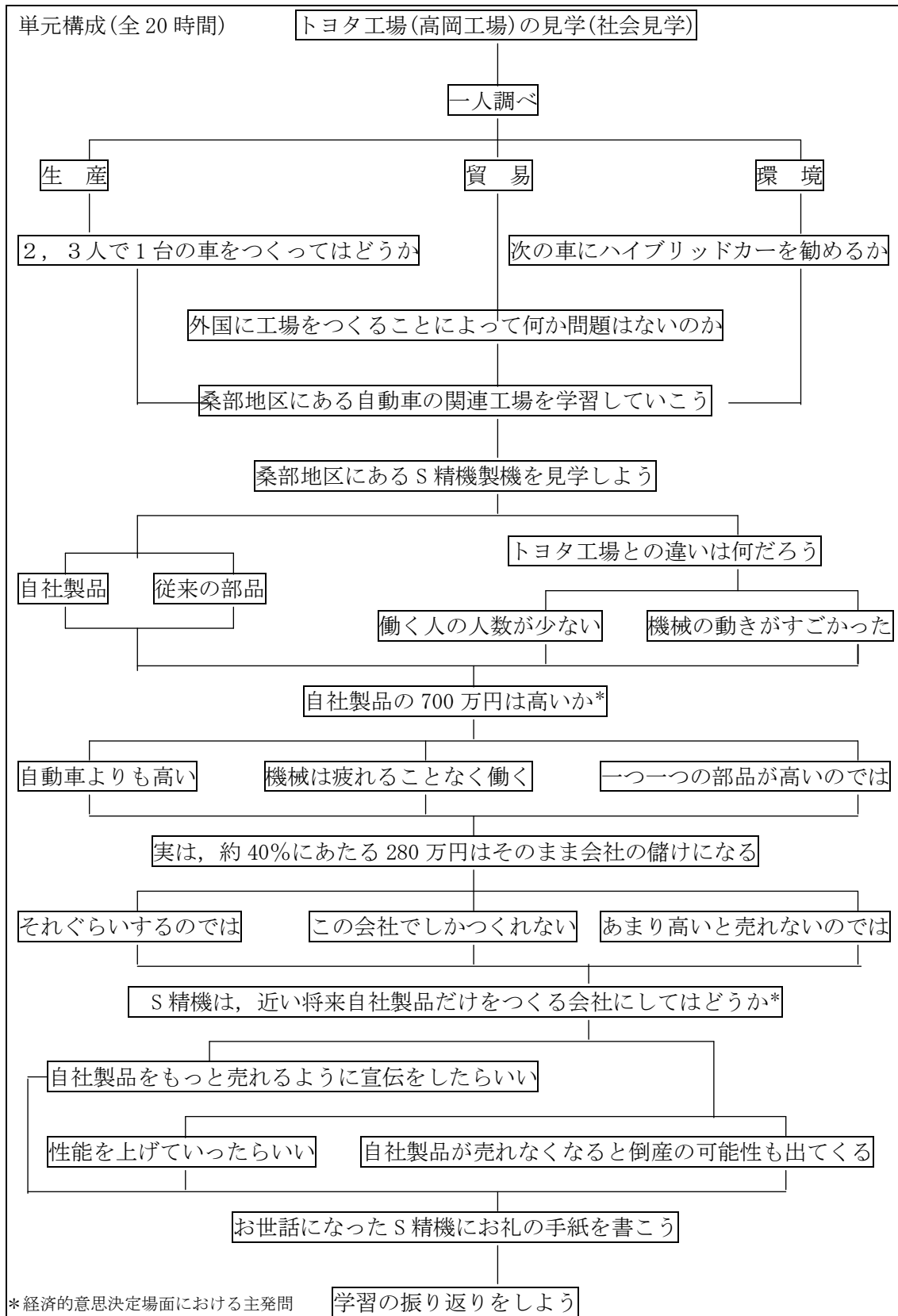


図 2 学習の流れの概略（後藤 2005,p.31 より転載）

とがわかる。

「S 精機は、近い将来自社製品だけをつくる会社にしてはどうか」についての授業は、「S 精機について何か思うこと」を考えた中で、「大きな会社（売り上げを増やす）にしたほうがいい」という意見と「そのままでもいい」とい意見に分かれ、「S 精機は、近い将来自社製品だけをつくる会社にしてはどうか」について話し合う、という流れで行われた。子ども達は、FCT はこのまま順調に売上台数を増やしていけるかどうかを中心に話し合いを展開している。順調に売れるであろうと考える子どもは、独立すべき、売れなくなるかもしれないと考える子どもは、このままでよいと考えている。この授業において、S 精機が会社を存続させていくには、どの選択がふさわしいのか、FCT の今後の売上予測をもとに、どのような「目的合理的」な意思決定をすべきかについて考えていることがわかる。

この実践では、「自社製品の 700 万円は高いか」について考えることを通して、S 精機の「目的合理的」な意思決定について学び、「S 精機は、近い将来自社製品だけをつくる会社にしてはどうか」について、子ども達に意思決定をさせている。S 精機の意思決定について学び、子ども達が意思決定を行い、その選択について話し合わせることで、社会的な見方や考え方が身についていることがわかる。後藤は、「グローバル社会が進む中で自社製品を開発し、外国製品にも競争で負けない独自製品を製造している工場を取り上げることにより、これからの中小工場の経済的意思決定を子どもたちに考えさせることができる」と考え、この実践を行った<sup>43</sup>。S 精機は、独自製品の開発により、「ハイリスク・ハイリターン」選択し、経営していこうとしている。子ども達は、S 精機の意思決定について学ぶことを通して、リスクを冒してまでも困難な方へ挑戦する「ハイリスク・ハイリターン」の生き方を知ることができた。さらに、リスクとリターンに視点を当てて、追究することにより「目的合理的」な意思決定について学ぶことができた。子どもの一人がこの学習を終えて、次のような感想を書いている<sup>44</sup>。

私は、今になってこの学習を振り返ってみると思い切って独立するという考えを持った自分に何でだろうと思いました。もちろん、自社製品が世界に一つしかない性能があることがすごいことだと思うのだけど、私はふだんでもどちらかという思い切ってということがないので、うらやましいと思ったのかもしれない。(一部抜粋)

<sup>43</sup> 前掲 34,p.30

<sup>44</sup> 後藤浩二(2010)「支える工場から自立する工場へ」三重「個を育てる授業」研究会・山根栄次/市川則文編『個の育成を目指す授業』三晃書房, pp.76-89



この子どもにとって、リスクを冒してまでも困難な方へ挑戦する生き方が自分を見つめ直すきっかけとなったことが分かる。

しかし、S 精機が優れた技術を要し、製品開発を行ったことはわかるものの、社員を巻き込むことになる倒産というリスクを冒してまで、なぜ安定した経営から、「ハイリスク・ハイリターン」の経営へ切り替えようとしているのか、S 精機には、仕事や経営に対してどのようなこだわりがあるのか、といった点について追究した様子は見られない。後藤は、「関連工場としての安定的な収入」と述べているが、親会社の生産動向の影響が大きい関連工場としての経営は、その割合が大きければ大きいほど安定的であるとは言い切れない。そうした背景があったからこそ、独立を決断したのか、または違う理由があったのかまでは、判断できない。

また、「その人の気持ちになってもものごとの価値判断をし、経済的な意思決定をしていくことができた」と述べているが<sup>45</sup>、子ども達それぞれがどのような考えや根拠をもとに意思決定を行ったのかについても資料がないため、分析できない。

## 第2節 「価値合理的」な意思決定を学ぶ実践

### 第1項 農業单元 橋本 顕彦「時江さんと私達の菊作り」

この実践は、橋本が担任した第5学年において、社会科・総合的な学習の時間を使い、一年間をかけて取り組んだ実践である<sup>46</sup>。菊の電照栽培が子ども達の住む地域で行われおり、クラスの一人の女子児童「はな」の祖母の時江さんも菊の生産者であった。時江さんから菊作りを教わって、自分達でも菊を作りながら、時江さんと関わり、時江さんの生き方から学んだ実践である。

長期の実践のため、「時江さんは白さび病を出した1万8千本の菊をどうしたのか考えよう」、「時江さんも孔雀草を作る方がよいか考えよう」の2つの授業について分析する。

子ども達が育てている菊が、商品価値をなくしてしまう「白さび病」になったことから、「病気の菊をどうしよう」、「時江さんは、1万8千本も白さび病にしまったそうだが、その菊をどうしたのか」と追究を始め、「捨てた」と考える子と「菊を大切に思っている時江さんが、捨てるはずがない」と考える子で意見が対立したことを受けて、「時江さんは白

---

<sup>45</sup> 前掲 34,p.39

<sup>46</sup> 橋本顕彦(2010)「時江さんと私達の菊作り」.三重「個を育てる授業」研究会・山根栄次/市川則文編『個の育成を目指す授業』三晃書房, pp.58-73

さび病を出した1万8千本の菊をどうしたのか」という問題について話し合う、という流れで進められた。「捨てずに売った」と考える子ども達と「菊を売らなかった・捨てた」と考える子ども達に分かれて話し合いが進められた。授業の後半で、時江さんから、「全部刈って捨ててしまった」、「白さび病の菊を刈る時に、誰かに見られないかと恥ずかしかった」、「捨てる時、つらくて泣いた」と聞き、時江さんの生産者としてのプライド、市場の信用を大切にしていることなどに気づくことができた。時江さんの菊に対する思いやこだわりを学んできた子ども達は、大切な菊を捨てるという時江さんの思い切った決断から、この授業において、子ども達は利益を優先するよりもプライドを優先した「商品である菊を捨てる」という生産者の「価値合理的」な意思決定について、学ぶことができたと言える。

子ども達は、時江さんを楽しめる方法をいろいろと考える中で、同じ菊生産者団体に所属する和彦さんから、孔雀草についての存在を聞いた。「時江さんも孔雀草を作る方がよいか考えよう」についての授業は、孔雀草について調べてみると利点が多いことが分かってきたが、「利点ばかりかな」、「時江さんは、孔雀草を作ることに賛成するだろうか」と考える子も出てきたことを受けて、「時江さんも孔雀草を作る方がよいか」について話し合う、という流れで行われた。「孔雀草の利点と時江さんにとってどうか」、「孔雀草の病気や農薬（消毒）について」、「時江さんは、菊と同じように愛情をもって孔雀草を育てられるかどうか」、「生産者のプライドと部会のチームワーク」、「時江さんに勧めるかどうか」という内容で、話し合いが進められた。子ども達は、これまで学習してきたことをもとに、「作る方がよい」、「作らないほうがよい」と自分なりの結論を出した。経費、時江さんの体調、育てる手間、花に対する愛情、生産者のプライド、菊部会の一員としての立場などを考慮した上で、子ども達は結論を導き出した。そして、時江さんの「自分は25年間、菊作りをやってきて、今やっと菊作りのことが分かってきて、面白くなってきた。他の花にかえるなら、花作りをやめる」という言葉を聞いた。この授業において、子ども達はこれまでに積み重ねてきたことを踏まえ、時江さんの置かれた状況に基づいて、利益だけでなく、さまざまな視点を考慮し、「価値合理的」な意思決定を行ったと言える。また、「これまでにやってきた菊を作り続ける」という時江さんの出した結論から、利益よりもこだわりを重視した「価値合理的」な意思決定を学ぶことができたと言える。

また、授業記録などの詳しい資料はないが、この学習では、子ども達も自分たちで育てた菊の販売も行っている。そのため、「菊をどうやって売るか考えよう」、「菊をいくらで売るか考えよう」など、自分たち自身の菊もどのように販売していくか話し合い、意思決定

を行っている。時江さんの置かれた状況に基づいての意思決定だけでなく、子ども達自身の立場からの意思決定も行っていると推察できる。

橋本は、意思決定という形で子ども達に学ばせようとした訳ではないが、時江さんの生き方に迫り追究していくことで、子ども達は意思決定を学ぶことができたと言える。生産者として利益を優先する「目的合理的」な意思決定ではなく、良いものを作り続けていくこだわりや生産者としてのプライドを大切にした「価値合理的」な意思決定を行ってきた時江さんの生き方を学ぶことができた。

二人の児童が第5学年の時の学習を振り返って次のような文章を書いた<sup>47</sup>。

菊作りをして、とてもよかった。理由は、今プラスになったり、いろいろな人との関わりが持てたりと、今に少し実行できたりするので、「よかった！」と思っている。それに、花を育てる大切さや仕事をしている人の思いや何ととっても家の人の気持ちがよく分かった。菊作りをしなければこんなに大切なことが分からなかった。菊を育てるのは今も大変だと思っている。これからも自分の考えを持って生き物を大切にしたり、菊作りで学んだことを少しでも実行できたりしたらいいなと思っている。

私が第5学年で学んだことはたくさんあるけれど、一番心に残っているのは時江さんの生き方です。これまで人の生き方を考えたこともなくて、でも時江さんの人生はとても奥が深くて、難しいものだと思います。それが分かったのは、時江さんに孔雀草を勧めて、時江さんが断ったときでした。時江さんは菊一本でいくとしっかり言っていました。時江さんは、本当にプロなんだなと思いました。私は、今では声優になりたいという夢を持っています。私も時江さんのように声優一本でやっていくと言えるような人になろうと頑張っています。時江さんの人生にふれることで自分の仕事に対する考え方がかわりました。

二人の児童は、時江さんのプロとしてのこだわり、生き様にふれることで自分の仕事に対する考えの変化や大切なことがわかったと実感している。

橋本の実践を分析した西良孝は、「生き方にかかわる価値はその後を追跡することによって明らかにされる」と述べている<sup>48</sup>。実践を通して自分を振り返り、考えが変わり、行動に変化が現れて、初めて本当の意味で「生き方につながる」と言える。この二人の児童は、「今プラスになったり、いろいろな人との関わりが持てたりと、今に少し実行できたりする」、

---

<sup>47</sup> 前掲 46,p.72

<sup>48</sup> 前掲 46,p.75

「私も時江さんのように声優一本でやっていくと言えるような人になろうと頑張っている」と実践後も時江さんから学んだ生き様を自分の生き方に活かしていることがわかる。

## 第2項 工業単元 二子石 雅敬「手作業にこだわるシャツ工場の挑戦」

この実践は、社会科の初志をつらぬく会第58回全国研究集会において提案されたものである<sup>49</sup>。熊本県にある「親会社の経営破綻を受け、一時は閉鎖寸前にまで追い込まれたものの、現社長と工場長が、『日本が誇るこの技術を廃れさせるわけにはいかない』という思いで事業を受け継ぎ、平成二十二年に再出発した縫製会社を取り上げた」実践である<sup>50</sup>。

縫製会社の概要は次の通りである<sup>51</sup>。

新しい会社として再出発した会社は、これまでの機械に頼る大量生産方式を捨てた。そして職人の技術を生かしたこだわりのあるシャツ作りをすることで商品に付加価値を生み出した。そのため生産枚数は減少したものの、一枚あたりの単価を上げることで売り上げを伸ばし、有名ブランドのOEMも多く取り扱うようになった。

また平成二十三年には自社ブランドも立ち上げた。このシャツが話題になることで、この会社の名は全国に広まりつつある。

この会社の躍進について、二子石は、次のように述べている<sup>52</sup>。

日本の工業分野において「下請け」と呼ばれ、「暗い」「低賃金」と言われてきた工場の負のイメージを変えようとしている。我が国の職人の持つ高度な技術を守り続けていく責任と、職人たちが誇りを持って働ける工場へと変えていこうとする熱意。産業の空洞化という課題への対策が迫られる我が国の産業全体を勇気づける事例であると捉えることができる。

単元の前半では、自動車作りについて学習し、「大量生産を行う上での流れ作業の有効性を確認すると同時に、機械化・自動化により、より速く、安全、確実に作業が行われるようになっていくこと」<sup>53</sup>が様々な工業生産において主流になっているという認識を持たせた。

後半で「機械を捨て、職人の手作業に変えたシャツ工場がある」という前半で学習した

<sup>49</sup> 二子石雅敬(2015)「手作業にこだわるシャツ工場の挑戦」,社会科の初志をつらぬく会 個を育てる教師のつどい『考える子ども』No.366,pp.50-68

<sup>50</sup> 同上書,p.55

<sup>51</sup> 前掲 49,p.55

<sup>52</sup> 前掲 49,p.55

<sup>53</sup> 前掲 49,p.55

こととは一見矛盾する事実を子ども達に与え、学習を進めた。この単元のねらいについて、二子石は次のように述べている<sup>54</sup>。

思考を深める中で、日本の工業が抱える課題に向き合いながら、より良いもの作りを目指そうと工夫、努力する従事者たちの姿を見つめることができると考えた。

仕事を単にお金を稼ぐための手段としてとらえがちな子どもたちに、困難に向き合いながらも人を大切に、願いを持ち、努力しながら生きる工場長の姿をぶつけたかった。そうすることで、お金で表せない思いの込められたもの作りの喜びや、人がつながり合うことの温かさについて考えるだろうと思ったからである。

前半で学習したことを踏まえて、「全自動のミシンをやめて、手動のミシンに替えた工場をどう思うか」について学習した。最初に工場の映像を提示した。これまで、大量生産・高品質・低価格化の「目的合理的」な経営について学んできた子ども達は戸惑った様子を見せる。話し合いを進めるなかで、手作りの良さや意味について、考え始める子どもが出てくる。追究していくなかで、子ども達は、「シャツ工場は、職人の技術による丁寧なものづくりで売り上げを伸ばしている」ことを知る<sup>55</sup>。このことを通して、子ども達は、利益を上げるには、大量生産・高品質・低価格化以外の方法もあるということを知る。

「なぜシャツ工場は自社ブランドを立ち上げたのか」についての授業を詳しく見ていきたい。二子石は、「順調な会社の伸びをより強く感じ始めた子どもたちに、『実は利益はまだまだ上がっていない』こと、そして、『それなのに、借金をしてまで自社ブランドを立ち上げた』という事実を伝えた<sup>56</sup>。」子ども達は、自社ブランドを立ち上げることのメリットとリスクを対比させながら考える中で、「なぜシャツ工場は自社ブランドを立ち上げたのか」について、それぞれの考えを深めていった。一人の児童が、「他の会社を勇気づけるために自社ブランドを立ち上げたのだ」と主張し<sup>57</sup>、その主張に対し、話し合いが進められた。「もともとと同じような境遇であった、倒産している会社や倒産しかけている会社に勇気を与えるため」という考えや「自分の会社がもうかることより、熊本の工業を盛んにしたい」という考え、「ライバルが増えたら、競争が不利になる」「もし、うまくいかない時には費用が無駄になる」というような考えが出され、話し合われた。そこから、会社の倒産件数や製造出荷額、日本の縫製産業の労働人口の推移などが、子ども達から示され、日本の工業

<sup>54</sup> 前掲 49,pp.55-56

<sup>55</sup> 前掲 49,p.60

<sup>56</sup> 前掲 49,p.60

<sup>57</sup> 前掲 49,p.61

の厳しい現状についての理解が進んだ。それを踏まえて、シャツ工場が独立したという事実について考えを書く。

この授業において、子ども達は、利益が上がっていないにもかかわらず、借金をしてまで自社ブランドを立ち上げたというシャツ工場の「価値的合理的」な意思決定を学ぶことができた。「ライバルが増えたら」「うまくいかない時には」という子ども達の意見からもわかるように、利益が上がっていない状態での自社ブランドの立ち上げは、相当なリスクを背負うこととなる。しかし、そこには、一人の児童が主張した「頑張っている会社の姿が他の会社を勇気づける」「熊本の工業を盛り上げていくことが大切だ」という考え<sup>58</sup>と重なる工場長の「日本のものづくりにもう一度光を当てたい<sup>59</sup>」という強い思いがあったからである。さらに、自社ブランドの立ち上げは、従業員たちにも大きな影響を与えた。「以前は与えられた仕事を黙々とこなすだけであったが、自社ブランドを立ち上げることで、仕事に対する『やりがい』と『誇り』が生まれてきたという<sup>60</sup>。」この実践を通して、子ども達は、「価値合理的」な意思決定を行った工場長の強い思いやこだわりを学ぶとともに、リスクを冒してでも挑戦することによって、従業員たちに「やりがい」と「誇り」をもたらしたことも学ぶことができた。

実践後に、二人の児童は次のような感想を書いている<sup>61</sup>。

僕が学んだことは、工業というのは「作れば良い」というだけでなく、品質の良いものを作ることが大切だということです。(中略)丁寧にするのは大切なんだなと思いました。
--

一度は倒産しても復活する。それには、勇気がいるし、説得する力が必要だから社長はすごいです。がんばれば、必ず幸せが訪れるということを学びました。
---

工場で働く人たちの仕事ぶりや仕事に対する考え、倒産してもあきらめず、前を向いて進もうとする生き様に強く影響を受けたことがわかる。これは、実践後の感想であるため、二子石は、「これが、これからの生活にどれくらいつながるのかは現時点ではわからない。せめて自分の生き方を考えるきっかけになればと願う。」と述べている。前項でも述べたように、実践を通して自分を振り返り、考えが変わり、行動に変化が現れて、初めて本当の意味で「生き方につながる」と言える。しかし、この二人の児童にとって、生き方を考えるきっかけとなったということは言うことができる。

<sup>58</sup> 前掲 49,p.68

<sup>59</sup> 前掲 49,p.68

<sup>60</sup> 前掲 49,p.69

<sup>61</sup> 前掲 49,p.68

### 第3節 先行実践の分析と課題

生き方につながる意思決定を学ぶには、第2章第2節第2項で示したように、社会的な見方や考え方を身につけることは前提として、生産者の実際の意思決定について学んだ上で、生産者の置かれた状況に基づいて児童が意思決定を行い、それについて検討し、最終的に、自分なら何を重視して意思決定を行っていくかを、自分の立場から考えて意思決定を行うという過程を踏まえることが必要である。4つの実践の学んでいる意思決定の段階・種類と生き方につながるものの関係性について分析し、表1に示した。

(表1) 各実践で学んでいる意思決定の段階・種類と生き方につながるものの関係性

	生産者の意思決定を学ぶ		生産者の置かれた状況に基づいた意思決定		自分の立場で意思決定		生き方につながる実践
	目的	価値	目的	価値	目的	価値	
後藤農業実践	あり	なし	あり	なし	なし	なし	×
後藤工業実践	あり	なし	あり	なし	なし	なし	△
橋本農業実践	あり	あり	あり	あり	なし	なし	◎
二子石工業実践	あり	あり	なし	なし	なし	なし	○

※表中の「意思決定を学ぶ」、「生産者の状況での意思決定」、「自分の立場での意思決定」の項目の目的は、「目的合理的」、価値は「価値合理的」を示す。「生き方につながる実践」の項目の◎は特に効果あり、○は効果あり、△は少し効果あり、×は効果なしまたは判断できず。筆者作成

それぞれ4つの実践が生産者の意思決定を学ぶ、「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」、「自分の立場で意思決定を行う」という過程を踏まえているか、学んでいる意思決定は、「目的合理的」な意思決定か、「価値合理的」な意思決定か、あるいはその両方かについて、表に「あり」、「なし」で示し、「生き方につながる実践」であったかどうかについて、◎、○、△、×で示した。子どもが学習を通して、自分を見つめ直し、振り返り、これからの自分を考えることができたり、さらに行動の変化が見られた場合を◎、子どもが学習を通して、自分を見つめ直し、振り返り、これからの自分を考えることができている場合を○、子どもが学習を通して、自分を見つめ直し、振り返りができたりしていれば△、子どもが学習を通して、自分を見つめ直したり、振り返りができたりしていないもの、

判断できない場合を×とした。

「生産者の意思決定を学ぶ」過程については、どの実践においても行われているが、後藤農業実践、後藤工業実践においては、「目的合理的」な意思決定のみであり、橋本農業実践、二子石工業実践においては、「目的合理的」な意思決定を学んだ上で、「価値合理的」な意思決定についても学んでいる。「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」過程については、二子石実践以外の3つの実践で行われている。後藤農業実践、後藤工業実践においては、「目的合理的」な意思決定のみであり、橋本農業実践においては、「目的合理的」な意思決定を行い、さらに、「価値合理的」な意思決定も行っている。「自分の立場で意思決定を行う」過程については、どの実践においても行われていない。

「生き方につながる実践」であったかについては、実践後の子どもの記述や様子から、橋本実践が最も「生き方につながる実践」であった。「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」の過程を踏まえてはいないものの、橋本実践と同様、「目的合理的」な意思決定、「価値合理的」な意思決定の両方を学んでいる二子石実践が生き方につながる実践が○になっていることから、「目的合理的」な意思決定に加えて「価値合理的」な意思決定を学ぶことが生き方につながる実践として有効であることがわかる。「価値合理的」な意思決定を取り扱うことで、人の生き方により迫ることができ、子ども達も人や教材に深く入り込むことができる。この2つの実践で扱われた教材はそうしたすばらしい教材であったということも言える。そのため、子ども達自身の生き方につながったと考えられる。

また、橋本実践は、「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」過程を踏まえることにより、二子石実践よりもさらに効果があったことがわかり、「価値合理的」な視点を含めた「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」ことは、「生き方につながる実践」に有効であるとわかる。

後藤工業実践からもわかるように、「目的合理的」な意思決定を学ぶだけでも生き方を学ぶことはできるが、「価値合理的」な意思決定を学ぶことで、より多くの生産者の生き方に触れることができ、さまざまな視点から、生き方について考えることができると言える。

これらの分析をまとめると、「生き方につながる実践」とするには、「目的合理的」な意思決定に加えて、さらに「価値合理的」な意思決定を学ぶことができ、子ども達が深く入り込める教材であること、「生産者の意思決定を学ぶ」、「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」過程を踏まえることであると言える。

しかし、4つの実践において、「自分の立場で意思決定を行う」過程は踏まえた実践はな



い。生産者と同じ状況に置かれた場合に、自分なら何を重視して、意思決定を行うかを考えさせることで、自分が大事にすること、していることを改めて考えることになり、自分を見つめ直し、これからの自分を考えることにつながると考えられるため、「生き方につながる」実践としてより効果があると考えられる。

さらに、生産者の意思決定を取り扱う上で、第2章で述べたように、生産者が少数の場合と多数の場合の両方を学ばせることで、よりこれからの生き方につながると考えられるが、「目的合理的」な意思決定と「価値合理的」な意思決定の2種類を取り扱い、生産に関わる人数が少ない場合と多い場合の2通りの意思決定を扱うことについても、4つの実践では見られない。

こうしたことから、生き方につながる意思決定を学ぶ産業学習では、「目的合理的」な意思決定に加えて、さらに「価値合理的」な意思決定を学び、「生産者の意思決定を学ぶ」、「生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」、「自分の立場で意思決定を行う」過程を踏まえ、生産者が少数の場合と多数の場合を取り扱う単元を構成することが望ましいと考えられる。

## 第4章 生き方につながる意思決定を学ぶ産業学習の開発

### 第1節 大単元「長島の産業」の構成

生き方につながる意思決定を学ぶ産業学習として、望ましい実践とは、「①生産者の意思決定を学ぶ」、「②生産者の置かれた状況に基づいた意思決定を行う」、「③自分の立場で意思決定を行う」過程を踏まえ、「目的合理的」な意思決定を学び、さらに「価値合理的」な意思決定についても学ぶ実践であるということが明らかになった。

これを元に、産業学習「長島の産業」を構想した。「長島の産業」は、農業単元と工業単元によって構成し、次の過程を踏まえることとした。

- ア 事実認識
- イ 問題の把握
- ウ 問題分析
- エ 生産者の意思決定について学ぶ
- オ 生産者の置かれた状況に基づいて意思決定を行う
- カ 自身の立場で意思決定を行う

学習の順序としては、農業単元、工業単元の順に学習することが望ましい。意思決定について学ぶ際に、「目的合理的な」意思決定と「価値合理的」な意思決定の2種類を取り扱うことが望ましいということこれまで述べてきた。一般的に、社会科につながる経済は、「目的合理的行為」によって行われている。そのため、社会科において求められる社会的な見方・考え方を身につけるためには、「目的合理的」な意思決定を学ぶことが有効である。

社会科において、「目的合理的」な意思決定を取り扱うことは前提として、「価値合理的」な意思決定をいかにして、取り扱うかについて述べる。

日本の農業は、個人、または家族のような少数で行っているため、生産者と経営者が同じ人である場合が多い。生産に関わる人数が少ない方が、作りやすい品種か味の良い品種か、農薬を使うか使わないかなど、品種の決定、栽培方法など、さまざまな意思決定を行う場面で、個人的な考えや思いを反映させやすい。生産者の意思決定を学んでいく上で、生産者が大切にしていることがそのまま意思決定に反映されてくるため、子ども達にとっても考えやすいと言える。橋本が実践した時江さんのように、利益を最優先するのではなく、仕事や生産に対して信念やこだわりを重視する人を教材として学ぶことで、「価値合理的」な意思決定についても学ぶことができる。

日本の工業においては、一般的には、工場で生産に関わる人数は、農業に比べて多いと言える。そのため、経営者と働き手が別の人となる場合が多い。生産に関わる人数が増えれば増えるほど、そこで働く人達の生活を守るためにも利益を追求しなければならなくなる。農業に比べて、より複雑な要素を踏まえて、意思決定をしていかなければならない。会社の理念や経営者のこだわりは非常に重要であるが、そのこだわりを貫き通すのか、さまざまな状況や事情を考慮して折り合いをつけていくのか、こだわりを貫き通しつつ利益を上げるのかなど、その会社の状況に合わせた現実的な選択が迫られる。企業である以上、利益を追求するのは当然であるが、何のために利益を追求するのか、その理由や背景に迫ることで、人の生き方が表れ、「目的合理的」な意思決定だけでなく、「価値合理的」な意思決定も学ぶことができると考えられる。

## 第2節 農業単元「長島のトマトの未来を考えよう」

長島町は、三重県で2番目に多いトマトの生産地である。しかし、全国的に見ると、トマトの生産量は、かなり少ない。そのようななか、長島のトマトを維持していくために、3年前から、約20人で作られる長島町園芸組合に所属するトマト農家を作る品種を味がよいかわりに、作ることが難しく、手間もかかり、収穫量も少ない「桃太郎プレミアム」のみに絞り、長島のトマト＝「桃太郎プレミアム」ということで、シェアを確保している。

実践では、校区において、ビニルハウスでトマトを栽培する専業農家の浅野さん、JAの三上さんの協力を得て、長島町の特産物であるトマト「桃太郎プレミアム」をいかにして売り込むか、なぜトマト農家になろうと思ったのか、この仕事に対する思いやこだわり、長島におけるトマト農家の現状や課題について学んだ。

### 「長島のトマトの未来を考えよう」

単元構成 全14時間

第一次 トマトについて知る（7時間）

- 1 トマトについて調べよう・・・ア（事実認識）
- 2 トマト作りで大切なことは何か考えよう・・・カ（自身の立場で意思決定）
- 3, 4 長島のトマトづくりを見学に行こう（2時間）・・・ア（事実認識）
- 5 トマト作りについての質問を考えよう・・・ア（事実認識）
- 6, 7 JAの人に話を聞いてみよう（2時間）・・・ア（事実認識）

## 第2次 トマトについて考える（全7時間）

8 トマトの作り方について考えよう・・・エ（生産者の意思決定を学ぶ）

9, 10 浅野さんに話を聞いてみよう

・・・ア（事実認識），エ（生産者の意思決定を学ぶ）

11 浅野さんはどんな人か考えよう・・・ア（事実認識）

12 トマト作りの問題について考えよう・・・イ（問題の把握），ウ（問題分析）

13 浅野さんはこれからどうするとよいか考えよう

・・・オ（生産者の置かれた状況に基づいて意思決定を行う）

14 どんなトマト農家を目指すとよいのだろう（環境，利益，味など）

・・・カ（自身の立場で意思決定）

### 授業の経過

第1時では、「長島で作っている農産物は何か」について考えた。子ども達は、長島の農産物といえば、ナバナの印象が強く、JAがトマトに力を入れていることを知っている子どもはほとんどいなかった。そこで、ナバナと同じぐらいJAがトマトに力を入れていることを伝え、トマトについて知っていること、勉強してみたいことなどについて話し合った。

第2時では、トマト作りで大切なことを考えた。利益を出すために、①たくさん作ってもうけを出す、②作るのにかかるお金を減らしてもうけを出す、③高く売れるものを作ってもうけを出す、の三つの選択肢のうち、自分ならどの方法にするかを意思決定させ、その理由について話し合った。

ただ、ここでははっきりとした数字を示さず、意思決定させたため、子どもによって、コストも生産量も値段もイメージしたこと、ズレがあるため、かみ合わないこともあった。

第3, 4時では、実際に浅野さんのビニルハウスへ見学に行った。ここでは、①ビニルハウスや周りの様子、②ビニルハウスの中の様子、③ビニルハウスの中にある道具や機械、④トマトの植え方、などを中心に見学することを伝え、各自が気づいたことやそこで話を聞いたことをメモした。

第5時では、見学してわかったことを整理しながら、わからなかったことや聞きたいことを出し合い、質問を考えた。主なものとして、トマトそのものに関する質問、トマトの作り方に関する質問、トマト農家に関する質問、出荷や輸送に関する質問などが出された。

第6, 7時では、JAの三上さんに来ていただき、質問に答えてもらった。

長島で作っているトマトは、「桃太郎プレミアム」という品種に限られていること、長島のトマトは、8割が京都の市場に運ばれることなどを聞き、多くの子ども達が驚いていた。

第8時では、ある程度のトマト作りについてわかったところで、もう一度トマト作りで大切なことについて考えた。三上さんの話を聞いて、長島で作っているトマトは「桃太郎プレミアム」であることから、子ども達の考えを出させた上で、なぜ「桃太郎プレミアム」だけを生産しているのかについて考えた。

第9、10時では、浅野さんに来ていただき、なぜトマト農家になろうと思ったのか、どのようなこだわりを持ってトマトを作っているのか、トマトを作っていて、嬉しいのはどんな時かなどの質問に答えてもらった。

第11時では、浅野さんから聞いた話を整理し、浅野さんはどんな人だと思うかについて、自分の考えを書き、話し合わせた。話し合いを通して、浅野さんのトマトに対するこだわりや生き方について考えた。

第12時では、長島のトマトが抱える問題について考えた。高齢化による働き手の減少、原油高によるコストの増加などについて考えた。浅野さんも長島のトマトを守りたい、との話を聞いて、子ども達の関心もトマト農家をどう確保していくか、というところにあった。

第13時では、浅野さんはこれからどうするとよいかについて考えた。この授業が②の段階にあたる生産者の置かれた状況に基づいて行う意思決定である。子ども達から一番多く出されたのは、浅野さんから聞いた話にもあった長島のトマトを守ることであった。トマト農家を維持していく、増やしていくためにどんなことが考えられるかを話し合った。出された意見をもとに、最後に一番自分が良いと思うものを選んだ。

第14時では、自分ならどんなトマト農家を目指すかについて考えた。③の段階の自分の立場から意思決定を行った。多くの子どもは、あきらめずに続けると答えた。中には、人を雇うという意見を出した子どもも何人かいて、雇うためのコストを意識しておらず、経営者としての視点が足りないと感じた。

この実践で地域の教材、しかも子ども達も好きな子が多いトマトを扱い、見学や話を聞くことを通して直接人と触れ合い学習したことで、これまでよりも興味を持って学習することができ、長島町のトマトや農業について考えるきっかけになった。

意思決定の場面を取り入れたことで、これまで自分の思いや考えをなかなか出せなかった子も少しずつ自分の考えを持ち、表現できるようになった。また、生産者の思いに触れ、

浅野さんの意思決定について学び、自分たちも生き方につながる意思決定をすることで、長島のトマトについて自分ができることを考えようとしている子も出てきた。中には、自分がトマト農家となって、長島のトマト作りを続けていきたいという子もいた。

一方、課題として、浅野さんの思いや熱意に触れながらも十分に深めきれなかった部分もある。また、意思決定した根拠となる資料や自分の考えについて、自分の考えを話したり、書いたりして表現することが苦手な子どもも多く、十分に示すことができず、曖昧になってしまった子もみられた。さらに、学習が終わった後の振り返りにおいても、自分のこれからの生き方に重ねられるようなところまで記述できていない子もいた。

### 第3節 工業単元「長島のI産業の未来を考えよう」

農業単元「長島のトマト作りについて考えよう」を踏まえて、工業単元「長島のI産業の未来を考えよう」を行った。前実践において、子ども達は、トマト農家である浅野さん個人を中心とした生き方につながる意思決定について学習した。この実践において、生産者のこだわりや生き方について、意思決定の過程を通して学習することができた。しかし、はっきりとした数字でデータを示さなかったことや、意思決定するための根拠となる要素が曖昧になってしまったという課題もあり、本実践では、数字をはっきりと示し、意思決定表を取り入れることとした。この単元では、農家個人ではなく、一企業としての意思決定について学ぶこととなる。前実践よりも多くの人に関わるため、意思決定の過程もより複雑になる。社長個人の思いや考えだけでなく、利益、会社の理念、社員の生活や働き方など、より多くの要素を踏まえた企業としての意思決定が必要となる。こうした様々な状況を加味した意思決定について学ぶことで、子ども達がこれから生きていく中で、自分の思いやこだわりを大切にしつつ、広い視野を持ち、物事を判断していく生き方につながると考えられる。

また、社長は、I産業が中小企業として生き残っていくためには、他に負けない魅力をつける必要があると考えているが、こうした考えを子ども達が学習していく過程から、自分の将来の生き方に重ね合わせられるのではないかと考えている。

I産業は、桑名市長島町にある中小企業の一つである。資本金は1,600万円。年間売上高は、6億5千万円。3年前に比べて、1.5倍に増加。従業員数は、37名。名古屋、東京、大阪に営業所がある。I産業では、主にホテル、公共施設などの家具、机を製造している。桑名市の小中学校の机の天板も製造し、全国からも注文が来ている。机の天板の製造数に

においては、おそらく全国一であろうとのことである。3年ほど前から天板の製造だけでなく業務用家具や業務用ベッドの販売も開始し、東京や大阪にも営業所を設立するなどして売り上げを伸ばしている。現在の製造の比率としては、学校用3割、その他の事業用が7割である。会社の理念の一つとして、「家具でいじめをなくしたい」があるように、未来の社会を支える子ども達に貢献したいという考えを持っている。

### 「I産業の未来を考えよう」

単元構成 全18時間

第一次 I産業について知る（7時間）

- 1 I産業について知ろう・・・ア（事実認識）
- 2～5 I産業へ見学に行こう・・・ア（事実認識）
- 6 I産業についての質問を考えよう・・・ア（事実認識）
- 7 質問の答えを聞いて、I産業で見学してきたことを整理しよう ア（事実認識）

第二次 I産業について考える（2時間）

- 8 I産業はどんな会社だろう・・・ア（事実認識）
- 9 I産業が大切にしていることは何か・・・ア（事実認識）

第三次 I産業の問題を捉え、意思決定について学ぶ（6時間）

- 10 I産業はなぜ机の天板以外のものを作り始めたか  
・・・エ（生産者の意思決定について学ぶ）
- 11 消費者が海外製品を買う理由 I産業製品を買ってもらうには  
・・・ウ（問題分析）
- 12,13 働く人達の願いとは I産業の学校製品はもうかるのか  
・・・ア（事実認識）、ウ（問題分析）
- 14 I産業が抱える問題は何か・・・イ（問題の把握）
- 15 I産業が会社として実現していることは何か・・・ア（事実認識）、ウ（問題分析）

第四次 I産業のこれからを考え、意思決定を行う（3時間）

- 16,17 I産業はこれから何を作っていくとよいか  
・・・オ（生産者の置かれた状況に基づいて意思決定を行う）
- 18 自分が考える理想の会社とは・・・カ（自身の立場で意思決定を行う）

## 授業の経過

第1時では、自分たちの使用している机の天板を作っている会社が校区にあることを伝え、興味のあることなどを出し合い、見てきたいこと、聞いてきたいことなどを考えた。学級の児童の中には、数年前まで保護者が働いていたという児童もいて、興味を持った様子であった。

第2時から第5時では、実際に、工場を見学し、会社の概要の説明を聞き、質問をした。そのなかでは、大変なこと、モノづくりをされていてうれしかったこと、この仕事をやっていて直したいことなどの質問の回答から、社長や工場長など、さまざまな立場の人から働き方や生き方につながる考えや思いを聞くことができた。

第6時では、見学してきたことをもとに、質問を考えた。見学時にかなり詳しく丁寧に説明してもらったため、作り方に関する質問よりも働き方や機械についての質問が多く出された。

第7時では、質問の回答を子ども達に伝え、見てきたことと合わせて、わかったことを整理した。

第8時では、「I産業はどんな会社か」ということについて考えた。子ども達からは、見学の時の様子や聞いてきたことなどから、お客さんを大切にしている、信用を大切にしている、信頼関係を大切にしている、などの意見が多く出され、I産業のお客さんや仕事に対するこだわりについて理解している様子が見られた。

第9時では、前時の話し合いをもとに、「I産業が大切にしていることは何か」について話し合った。話し合いの中で、多かった意見は、「お客さんとの約束を守ること」であり、納期を守ること、信頼関係が成り立っており、守れないときは、会社の存続にも関わるということに気づくことができた。

第10時では、「I産業はなぜ机の天板以外のものを作り始めたか」について学習した。この時間が子ども達がI産業の意思決定について学ぶ時間となる。創業当初から、机の天板を作り続けてきたが、なぜ、リスクを伴うにもかかわらず、天板以外のものを作り始めたのかについて考えた。そこに、海外製品が大量に入ってくることや少子化などの影響から、社員を守るため、会社を存続させていくためには、事業拡張（I産業では、事業変化としている）をせざるを得なかった社長の意思決定について学んだ。

第11時では、前時の話し合いの様子から、海外で作られる製品とI産業の製品の違いについて、あまり理解できていない様子もあったことから、「消費者はなぜ海外製品を買うの



か」について、話し合った。机の天板をI産業の製品と中国製の製品の値段を提示して比較させて考えさせた。話し合いを通して、注文の数が多ければ、金額の違いも大きくなり、品質に違いがあるにも関わらず、安い方を選ぶことがあるということに気づくことができた。その後、「I産業の製品を買ってもらうためにはどうするとよいと思うか」について、話し合った。子ども達からは、値段ではなくサービスやアフターケアなどで勝負するという意見も出されたが、中には、もっと値段を下げると思った児童もいた。

第12時では、「社員がどのようなことを考えて仕事をしているのか」について考え、I産業で話を聞いたことを確認した後、前時の様子から「I産業の学校製品はもうかるのか」について考えた。もうかると考えている子が多く見られ、理由を聞いていくと、全国から注文が来るから、学校や子どもの数がすごく多いから、事務所が新しかったからもうかっているはずだ、というような理由が出された。

第13時では、前時の話の内容から小学生、中学生の数の推移を表したグラフを提示し、多いときの半分ほどになっていることに気づかせた。しかし、それでも子ども達は、数百万という数を見ると多いと感じるようで、まだもうかるという意識が拭えず、こちらからI産業の実際の様子を伝えた。

第14時では、「I産業が抱える問題は何か」について考えた。話し合いの中で、①売り上げの減少、②少子化、③働き手の減少、④他社、海外製品との競争の4つの意見が出された。これからの社会状況を踏まえた上での企業の在り方について考えることができた。

第15時では、教科書に出てくる内容をもとに、「I産業が会社として実現していることは何か」について考えた。働く人にとって、大切なのは、やりがい、安定した収入、自分の能力を生かせる、社会貢献などであり、I産業はどれが実現できているのかについて考えた。第16時では、「I産業はこれから何を作っていくとよいか」ということについて、資料1を使い、意思決定表(表2)を用いて、意思決定の授業を行った。最初にこれまでに学習してきた内容や資料をもとに意思決定表を作成する。その後、今後、I産業が作っていくとよいと考える製品を4つのうちから1つ選ぶ。その際には、自分が選択する際に重視した理由の番号①～⑤いずれか一つを書き、自分の言葉で理由をプリントに書き込んだ。

第17時では、前時に書き込んだプリントをもとにクラスで話し合いを行った。結果は、選んだ製品については、A天板 16%、Bイス 20%、C机 24%、Dベッド 40%であり、選んだ理由については、①売上 48%、②こだわり 28%、③将来性 8%、④経験 8%、⑤競争 8%であった。

伊藤産業はこれから何を作っていくとよいか 資料

第18時では、これまでに学習してきたことを踏まえて、自分が会社を経営するなら、どこにこだわって会社を経営するかを前時に使用したプリントを使い、①売上②こだわり③将来性④経験⑤競争の5つから理由を1つ選び、自分の考えを書かせて交流した。

結果は、選んだ製品については、A天板 16%、Bイス 20%、C机 24%、Dベッド 40%であり、選んだ理由については、①売上 48%、②こだわり 28%、③将来性 8%、④経験 8%、⑤競争 8%であった。

第17時でI産業の置かれた状況に基づく意思決定と第18時で、子ども達自身の立場での意思決定によって選んだ製品が異なる子がいたという結果は興味深いものであった。この第17時、18時において、売上を重視した子どもが半数近くいたが、ただお金もうけをしたいがために売上を追求するのではなく、「社員を養えない」、「いい製品を作るためには、まずお金が必要」など、利益を追求する背景がしっかり持っていることが明らかになった。I産業の学習によって、「目的合理的」な意思決定だけでなく、「価値合理的」な意思決定を学んだためであると考えられる。単元終了後の感想には、I産業を見習って、「ていねいに取り組む」、「約束を守る」、「努力を続ける」など前向きな記述が多く見られた。

#### 第4節 授業実践の成果と課題

各単元終了後と「長島の産業」の終了後に子ども達にアンケートを実施した。農業や工業を勉強して、「今の自分やこれからの自分の考え方や行動にプラスになったか」という項目を設けた。それぞれの回答の内訳については、以下の通りである。

「長島のトマト作りを勉強して、今の自分やこれからの自分の考え方や行動にプラスになったか」

- ①思う 4人 (16%)
- ②少し思う 19人 (76%)
- ③あまり思わない 2人 (8%)
- ④思わない 0人 (0%)

「I産業のことを勉強して、見習いたいこと、これから大事にしていきたいことができたか」

- ①思う 7人 (28%)

②少し思う 16人 (64%)

③あまり思わない 1人 (4%)

④思わない 1人 (4%)

「長島の農業や工業を勉強して、今の自分やこれからの自分の考え方や行動にプラスになったか」

①思う 7人 (28%)

②少し思う 17人 (68%)

③あまり思わない 1人 (4%)

④思わない 0人 (0%)

以上の結果から、全員とは言えないもののほとんどの子どもが自分のプラスになったと答えている。さらに、農業単元に比べて工業単元の方が、若干ではあるが、「②少し思う」から「①思う」、へ変わって増えていることがわかる。子ども達の授業後の感想を見ると、農業単元では、一生懸命な姿や好きなことに打ち込む姿、暑い時でも休みなく毎日働く姿に共感を覚えた様子であった。工業単元では、「家具でいじめをなくしたい」というI産業の理念や「会社は、みんなが同じ方向を向いて、一つになって進んでいくことが大切」、「お客さんに頼まれた仕事は、みんなで残業してでも間に合わせる。約束を守ることは大切」というような言葉を聞いて、自分の学校生活につなげて考えやすい話をしてもらったこともあって、工業単元の方が「①思う」が増えた理由ではないかと考えられる。また、農業単元を学習してからの工業単元ということから、社会的な見方や考え方が身についてきたからこそ、よりI産業で聞いた話に納得ができたのではないかと考えられ、農業単元があつてこそその結果でもあると言える。

このようなことから、「生産者の意思決定を学ぶ」、「生産者の置かれた状況で意思決定を行う」、「自分の立場で意思決定を行う」過程を踏まえ、「目的合理的」な意思決定と「価値合理的」な意思決定を取り扱い、学ぶことで「生き方につながる意思決定」を学ぶことができたと言える。橋本の実践を分析した西良孝は、「生き方にかかわる価値はその後を追跡することによって明らかにされる。」と述べているが、まさしく、その通りである。あくまで、授業は子ども達が自らを振り返り、成長していくためのきっかけ作りである。実践後のアンケートにおいて、ほとんどの子どもが浅野さんやI産業の姿から、自分も頑張っていきたい、まねしていきたい、などと記述しているが、記述したことを実践して、初めて本研究の成果

があったと言える。

しかし、これまで述べてきたように、本当の意味で「生き方につながる」実践であったのかは、すぐにはわからない。この実践が生き方につながることに期待したい。

今年度は、担任としてではなく、専科として子ども達と関わっているため、実際の姿として、行動が変わったところまでは掴めていない。今後、子ども達との関わりを通して、検証していきたい。

## おわりに

この研究は、社会科の学習を通して、子ども達が一生懸命にこだわりを持って働いている人に出会い、その人の生き方や考え方などに触れ、学級で話し合うことを通して、考えを深め、自分を見つめ直し、これからの自分の生き方を考えていくことをねらいとして行ったものであった。

この研究を進めるにあたって、多くの方に話を聞かせていただいた。どの方も忙しいにもかかわらず、快く対応していただき、実際に貴重な現場を見学までさせていただいた。ただただ感謝である。子どもが人から学ぶことをねらいとした研究であったが、最も人と出会うことにより、学ぶことができたのは、筆者自身のように思う。

人と出会うこと、人から学ぶことの大切さ、素晴らしさに改めて気づかされた研究でもあった。この研究を通して素晴らしい人や教材と出会うことができた。しかし、その素晴らしい教材を十分に生かすことができたとは言い切れないところに悔しさが残る。もっと子どもが興味を持って学習に取り組み、力をつけることができたのではないかと、実践を振り返る中で反省の多い実践でもあった。

しかし、本実践において、多くの子どもたちが浅野さんや三上さん、I 産業で働く人達から、学んだことが自分のプラスになったと答えていたのは、喜びであった。この研究における実践が、子ども達の本当に生き方につながるのか、つながったのかは、これからの姿を見ていかなければならない。これからの子ども達の姿が変わっていくことに期待したい。

本研究を進める上で様々な方にご指導、ご助言をいただいた。三重大学教育学部社会科教育研究室の山根栄次教授、永田成文教授には本論文作成にあたり熱心に根気強くご指導をいただいた。また、子ども達の見学を快く受け入れ、子ども達の前で話をしていただいた浅野さん、三上さん、水谷さんをはじめとするI産業の皆さんに深く感謝をしたい。

最後に、実践研究に協力いただいた長島中部小学校 5 年生担任の三名の先生方、子ども達、2 年間現場を離れるにも関わらず、快く送り出してくださった管理職をはじめとする職員の皆様にも併せて心からの感謝の意を申し上げたい。

## 参考文献

- ・文部科学省(2008)『『生きる力』と資質・能力について（平成20年中央教育審議会答申抜粋）』
- <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm)>
- ・亀井浩明/有園格/佐野金吾『キーワードで読む教課審答申』ぎょうせい,1998
- ・国立教育政策研究所『キャリア教育への招待』東洋館,2007
- ・山根栄次「社会科と総合的な学習の時間における起業家教育の意義と方法」三重大学教育学部研究紀要,第54巻,教育科学,2003
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館,2008
- ・『小学社会 5年上』日本文教出版,2015
- ・『小学社会 5年下』日本文教出版,2015
- ・坂本光司『日本でいちばん大切にしたい会社』あさ出版,2008
- ・山根栄次「小学校における経済的見方・考え方の指導（Ⅰ）」熊本大学教育学部紀要第33号,人文科学,1984
- ・山根栄次「山田勉の工業学習論・産業学習論の検討」三重大学教育学部研究紀要,第49巻,教育科学,1998
- ・橋本顕彦「問題解決学習としての工業学習の史的探求」三重大学教育学研究科 修士論文,1996
- ・山田勉『社会科教育法—問題解決学習のすすめ—』秀英出版,1976
- ・小原友行「社会科における意思決定」社会科認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック—新しい視座への基礎知識—』明治図書,1994
- ・マックス・ウェーバー,清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫,1972
- ・後藤浩二「子どもの経済的意思決定を活かす産業学習」三重大学教育学研究科 修士論文,2005
- ・橋本顕彦「時江さんと私達の菊作り」三重「個を育てる授業」研究会・山根栄次/市川則文編『個の育成を目指す授業』三晃書房,2010
- ・二子石雅敬「手作業にこだわるシャツ工場の挑戦」社会科の初志をつらぬく会 個を育てる教師のつどい『考える子ども』No.366,2015